0057326000

0057326-000

特２７５－７０６

兵営の異聞と秘話

陸軍省新聞班つはもの編輯部・編

新知社

昭和８

AJF

陸軍省つはもの編輯部編

兵營の異聞と秘話

兵營の異聞と秘話

陸軍省新聞班
つはもの編輯部

643-109

はしがき

題して『兵營の異聞と祕話』といふ。それだけ餘り世間には出ない興味ある讀物である。

兵營といへば軍紀で固められた嚴肅なる存在であると何人も考へてゐる。正に其通り苦樂を共にし生死を同ふする軍人の家庭であつて其起居の間に於て軍紀に慣熟せしめ軍人精神を鍛練する所である。

だが何といつても人形や器械の集りではない。血の氣の多い各種階級の壯丁の一大集團である。

女學生が百名集つてさへ相當面倒である。

若い軍人が何百千と集つて、其間に何等の面倒がない樣では反つて心細い。

嚴肅なる軍紀の下にも鬱積したる感情の動きあり、過誤あり、ユーモアあり、或

は時として罪惡のあるのも自然である。

此の複雜したる壯丁の集團、兵營の生活を一絲亂れざる如く統制し、一朝事ある時は奮つて國難に趣き喜んで任務に斃れる如く訓練する所に軍隊教育の價値があり兵營生活の妙味があるのである。

本書蒐むる所何れも未だ世に多く發表せられず極めて珍奇にして興味津々たる中に讀者をして自ら反省自覺せしむるに足るものばかりである。

單に興味と感激の資料たるのみならず又以て教育修養の參考とならば幸せである。

昭和八年七月二十五日

編者

兵營の異聞と祕話　目次

怒鳴る戰友……（一）
シタを出せ……（七）
心を打つビンタ……（九）
フジン教育……（一六）
內務檢査の前夜……（二一）
殿、閣下問答……（二七）
叱られて褒賞休暇……（二九）
ニキビの悲哀……（三七）
上等兵の歸省……（三九）
陽氣な初年兵の手紙……（四六）
軍旗步哨……（四九）

はかない威厳……（五七）
殘飯受難……（六一）
色氣を出せ……（六九）
召集兵の入倉……（七三）
肉彈の息擊……（七七）
擬製彈に敬禮……（八一）
饅頭懺悔……（八八）
毆られた召集兵……（九三）
浴場騷動……（一〇〇）
聯隊長の方針……（一〇五）
戰友の味……（一一三）
慰問袋の來た日……（一一五）
目さまし時計……（一二〇）

要領と誠意……（一二三）
正確な報告……（一二九）
一つの決心……（一三一）
ほまれのけむり……（一三八）
擊發裝置……（一四一）
火藥庫歩哨……（一四八）
馬糞長の信念……（一五一）
洗濯を命ぜられた妻君……（一五七）
無言の慈愛……（一五九）
神樣と股ほたん……（一六三）
鳩一等兵……（一六四）
無形の精勤章……（一六八）
内祕の願ひ……（一七三）

周章てるなッ……（一七五）
溢れる元氣……（一八二）
柳の芽は光る……（一八四）
敵はドヤドヤ……（一九一）
弟の手紙……（一九三）
バスの失敗……（二〇〇）
鞍をかくされた彦左……（二〇三）
宿舍の奇緣……（二〇九）
土瓶と中隊當番……（二一三）
雪の日曜……（二一八）
軍隊愛に泣く者……（二三〇）
齒痛とまめの手柄……（二三七）
雪に埋れた草……（二三二）
賴むゾラ……（二三七）

兵營の異聞と祕話

怒鳴る戰友

『ときに君の苗字は何とよむんだ、バカに難しいんだな』

『キトウと讀みます』

『鬼頭と書いてキトウだとは思ふが隨分珍らしいんだな。まあこれからたのむぞ、解らん事は聞いてくれ、出來るだけ敎へてやるから』

『ハッ、お願ひします』

鬼頭は戰友と決まつた桃井上等兵がやさしく云つてくれるので全くうれしかつた。

寢臺につくまでは、桃井上等兵はまるで鬼瓦みたいな顏をしてゐたので、いくら上等兵で

も、こんな、こわさうな戰友を持つてはおつかないと思つて、内心ビクビクしてゐたのだが、消燈後、かうして枕を竝べてねてゐると、晝間とは變つてやさしい言葉をかけてくれる。

やつぱり名前の樣にやさしい桃井上等兵だ。顏はまるで、自分の名前がそつくりの鬼頭だが…

（まあ併し、やれやれだ、自分は中學出なんだものだから、人一倍努力して大いに眞面目にやらないと生意氣な奴だと云はれるだらうな、まづ戰友の上等兵殿から、大いに御きけんをとつておかなくちやならん。

何でも軍隊は要領が第一だと云ふ事を聞いてゐる。

一つ明日の朝は早く起きて、上等兵殿の靴を磨いておかう。俺は何しろ、背は高いし、その上、顏の方も、ヒゲのアトが青々としておやじ臭いし、人の目につきやすいおまけに中學出だなど云ふので一倍憎くまれ易いに違ひない。

能ある鷹は爪かくすと、知つてる事でも知らん振して、みんなの後から後からとやつてゆかう、それに限る。何しろ二年が無事に越せばいゝんだ。上等兵などになる必要はない。……）

鬼頭初年兵、眠れないまゝにそんな事を殊勝らしく考へてゐる。

となりの上等兵はもうスヤスヤ寢息をたてゝゐる。

初年兵は流石にねつかれないものもあるのか、むかうの方でゴソゴソ起きて鼻をかんでゐる者がある。

（俺は檢査の時、公會堂で微兵官から甲種合格と云はれたときは何やら肩身が廣い思ひがしたつけ。丙種合格なんて云はれた奴はヘンにベソかいた顏つきをしてゐたつけ。歸つてお祖母さんに甲種だつたと云ふと

『そりやよかつた。男の子が兵隊にも行けんようでは役に立たん、お前も立派にお國の垣になつた』と云つた。

お國の垣とはお祖母さんうまい事云ふと思つたが、つまりはお國の生垣と云ふわけだな、俺はバク然としかまだ解らないが、一晩でもかうして、革臭い班内で寢てゐると何だかそんな氣がする。)

鬼頭初年兵はそんな事を思ひ乍らウツラウツラしてゐるうちに、窓が明るくなつた。

(さあ起きて靴を磨くんだ。何でもかでも、俺は上等兵のウケをとらんといけない。)

と、鬼頭は、靴バケが入つてゐると聞いた袋から、ハケを取り出した。靴墨があるかと思つたら、そんなものはない。

まてよ、ハケだけでもいゝ。

埃だけでもとつておけばいゝだらう。

鬼頭は桃井上等兵の靴をそつと持つて、ブルッと寒氣のする夜明けの中隊裏へやつて來た。

幸ひに誰にも見られないので、持つて來た上等兵の靴を、ティネイに刷毛でこすり出した。

いやに固い皮だと思ひ乍ら、なほもやつてゐると頭の上で突然

『バカッ、今頃何をしとるか』

と大聲にどなりつける者がある。

跳び上つて見ると、あの戰友桃井上等兵が眞赤な顏でにらみつけてゐる。

『そこで何をしとるんだ、バカッ』

又大喝である。

『ハッ靴であります』

『靴がどうした、それは、誰の靴だ、お前の靴ぢやあるまい、大體、お前は靴の手入れを誰に教へて貰つたかバカッ』

鬼頭は靴刷毛を片手に、眞正面からバカッを受けてつつ立つてゐる。

『まだ起床ラッパは鳴らん、寢臺に歸つてねろバカが』

鬼頭は慌てゝ靴をブラ下げて班へ歸つて又寢臺へもぐり込んだ。

上等兵は小便をして來たのであらう。暫くしてから歸つて來た。

『おい鬼頭、お前の考へは間違つとる。軍隊は、そんな要領やゴマかしでは通らんぞ、お前は、少しばかり學問が出來て、人より頭が働くだけ、よけいに惡い。そんな事は決して賞めら

れん。靴を磨いて二年兵のウケをとらうと考へる心掛けは、實に間違つとる。俺も實は中學を出て、入營したんだ。

始めは矢張りお前の様に考へて憎まれん様にやつてゆけばいゝと考へたが、だんだん、それが間違つてる事に氣がついた。共同生活には一人一人のおべつかや、要領では到底役に立たないんだ。全體が眞劍に眞面目にならんと駄目なんだ。

お前もおそらくいゝかけんで二年を過したらいゝと考へたらうが大きな間違ひだ。そりやお互ひに教練は上手に出來るかも知らん。併し乍ら精神の訓練はそのつもりにならんと二年やそこらでは出來るもんぢやない。

軍隊生活は、單なる形式の訓練ではない。人間の共同生活のほんとの精神訓練を受けるところだ。俺は今度來る初年兵の中に矢張り中學出のお前がこの中隊に來て、しかも俺の班に來て、戰友になると聞いたときから、さう思つたんだ。ヨシ、その男もキット間違つた考へを持つてるんだらう、俺が一つ戰友として立派に教育してやらうと。

おい鬼頭、お互ひにこれからそのつもりでやつて行かうぜ、俺はお前を虐めてるんぢやな

いんだ。解つたかおい鬼頭』

桃井上等兵は底力のある聲で、寢臺の鬼頭の耳許でそれだけ云つて了ふと自分の寢臺へもぐり込んだ。

鬼頭は思はず耳が眞赤に火照るのをおぼえて、たゞむやみに口の中で

『惡かつた、よく解つた』と繰返してゐた。

暫くして起床ラッパが喨々と鳴り響いた。

桃井上等兵は例の鬼瓦の様な顏をムッチリさせて、鬼頭に毛布の疊み方を敎へてゐた。

シタを出せ

同年兵の吉田がある朝、頭痛がするので診斷を受けに行つた。

軍隊の診斷はまだ始めての事でオドオドしながら醫務室へ行つて順番のくるのを待てゐた。

順番が來たので八字ヒゲのいかめしい軍醫の前に吉田も腰をかけた。

二等軍醫は初年兵吉田の少し青ざめた顏を眺めて訊いた。

『どこが惡いのか』

『ハッ昨夜から頭が痛いのであります』

『ウンさうか、どれ、シタを出して見い』

『ハッ自分はただ頭が少し痛いのであります』

『だからシタを出せ』

『ハッ』

吉田君モジモジして一向シタを出しさうにもない。

『出せと云つたら出せばいゝんぢや、遠慮するナッ』

『ハッ』

吉田君遠慮するナッの一言に、上官の命令とばかりあわてゝ上衣のボタンを外して、ズボンを下にズリ落してあはや……

『オイオイ何をしとるんぢや、舌ぢや舌ぢや、ベロを出せと云つとるんぢや』

軍醫は慌てゝ自分の舌を出して見せた。

眞赤になつた吉田初年兵、

『ハッベロでありますか』

心を打つビンタ

日夕點呼が終つて、漸く初年兵達も自分自身の身體に解放せられたと思つてゐると、突然

『初年兵は北室に集れ』

と怒鳴る聲がした。

一同思はずドキッとして云ひ知れぬ不安と恐怖とに襲はれた。

聲の主は相變らず亂暴で名高いA一等兵だ。

初年兵達は物をも言はずにぞろ〳〵と北室へ集つて、互に顔を見合せてゐた。

『何だらう』

『何だらう』

『又例の精神訓戒だよ』

ヒソ〳〵話し合つてゐる聲もおびえてゐる。

『何でも今日初年兵が演習に出たあと、二年兵が班内の敷布を調べて歩いたさうだ。きつと何かあつたんだよ。』

『昨日も古兵さんが、近頃初年兵は生意氣だ〳〵といつてたよ』

『シーッ誰か來たぞ』

一同しづまりかへつて不動の姿勢をとつてゐると、A一等兵が肩をいからして這入つて來た。

いきなり

『お前達は此頃生意氣だぞ』

頭からどやされて、何が何やら判らないが一同水を打つた樣にしてゐる。

『お前達は一たい二年兵のことをやつてやる氣はあるのか、

今日皆の敷布を調べて見たら此の通りだ。

これで戰友といへるか。

これ見ろ』

と手に持つて皆の鼻先につき出されたのは汚くよごれた幾つかの敷布だつた。

何れも初年兵のものではなく二年兵のものばかりだ。

初年兵達は忙しい中にも自分等の敷布だけはどうにか洗濯してあつた。そして暇があれば勿論戰友であろ二年兵の分も洗つて置くのだが、第一期檢閲の近寄つてる此頃の忙しさでは到底

そこまで手は及ばなかつた。

自然二年兵達の敷布はうす汚くよごれてゐた。

『これでいゝのか』

誰も返事をしない。

『小池、山田、二人前へ出ろ』

二人はモヂ〳〵し乍ら前へ出て行つた。

嵐が來るぞと一同固唾を呑んでゐると、恰度其時消燈喇叭が鳴り出した。

一同は漸く赦されて班に歸つて寢た。A一等兵もねたらしい。

そして小池、山田の兩名だけは汚れた敷布を抱いて不動の姿勢をとつたまゝ、何時までも〳〵

暗闇の中に殘された。

○

暫くしてから暗闇の中に、A一等兵の聲がする。

『一寸此方へ來い』

二人を自分の寢臺の前に立たせて置いて、寢床の中から又小言を初めた。

そして何でも『お前等は顏つきからして生意氣だ』といふのでありた。

二人は親から貰つた顏つきが生意氣だといはれてもどうすることも出來ないと思つた。

他の初年兵達も、皆まだ眠つてはゐないらしい。

其時である。

突然初年兵掛のM上等兵が飛び起きて來た。そして暗闇の中で

『オイその二人一寸こつちへ寄れ』

と稍怒氣を含んだ聲で呼んだと思つたら、鏡て黑暗の中にビシヤリ〳〵と物凄いビンタの音

が響いて來た。

驚いたのは小池、山田の二人だ自分等は打たれてはゐない。誰が打たれてゐるのかさつぱり

判らない。

『よし、二人共歸つて寢ろ』

二人はいぶかり乍らそれでも義分安堵の胸をなで下して床に這入つた。

靜かな時間が續いて、初年兵達は朝日くは寢床の中でふるへてゐた。

○

翌朝初年兵は平常の通り教練へ出た。

午前、前段の教練が終つて休憩に移つた時練兵場の一隅でM上等兵が初年兵を集めて次の樣な話をしてくれた。

『軍隊はいろんな人間が集つてゐるのだから、或程度のことは覺悟してなければならない。だが決して心配するな、見る人がちやんと見てゐるのだから。

俺も初年兵の時には隨分毆られたもんだ。

やつぱり『お前の顏つきが生意氣だ』といはれる時が一番困つた。殊に俺が中學校をゐるもんだから、外の者なら笑ひ話しで濟むところも俺ばかりはそのまゝぢや濟まされた。

だが弱い氣を出しちや駄目だ。

どうせ非常識なことをする奴に限つて錄な奴ぢやないんだ自分の心に間違つた所がないとつてゐるものゝ方が强いんだ。

お前等は女や子供ぢやないんだから一つや二つビンタ喰つたつておじけるな。

戰さで負傷することを思へば何でもありやしない。

そんなものに平氣で堪へられるだけの體力と氣力を養つて置けばよいのだ。

俺はその積りで初年兵時代を過して來たから今思ひ出しても別に苦しかない。

そして俺は人をなぐることだけはやらないよ。卑怯だからね。

昨夜黑暗でビンタしたのは實は俺が自分で自分の頰を打つて、音をたてたんだ。

あれでA一等兵の奴も氣が安まつたらう』

此の言葉を聞いて初年兵達は啞然とした。——さては昨年暗の中に響いたあの凄いビンタの音はM上等兵が我れと我が頰を打つて初年兵を助けてくれたのか——

一同次の瞬間云ひ知れぬ感激に襲はれこのM上等兵の溫情と義擧とに無限の感謝を捧げた。

特に山田と小池とは心の中で泣かんばかりに感激した。

フジン教育

型の如く、日夕點呼の際、命令が達せられた。

最後に一段と聲を張り上げて

『よく聞いて居れ』

と班長は緊張した面持である。一同、さては時節柄、派遣命令ででもあるのかと固唾をのんで、次の言葉を待つた。

『明日から聯隊でフジン教育を實施する事になつた。希望者は班長の許まで申出でよ、その中から適任者を選拔して上申する豫定である。細部に關しては個人毎に注意を與へる事にする。係官の注意を守つて、教育を受ければいゝのだ。

このフジン教育は、直ちに北滿の野に活動する事が出來るのだ、一人でも多くこの班から出したいものだ。エヘンエヘン』

と妙に咳拂ひをし乍ら、班長は班長室へ歸つて行つた。

さあ班内は俄然緊張した。

早速二年兵の一人

『初年兵集レ！　そのまゝでよろしい、休メ！

今の班長殿のお話について、初年兵はわれわれ二年兵より先に申出てはならぬ、二年兵は何と云つてもお前等よりは教育の適任者であるんだ。解つたか』

『ハイ解りました』

と初年兵、内心少々不滿であるが仕方がない。

二年兵連中集つて、

『實は、今日酒保で、友人から聞いたんだが、今度赤十字病院の看護婦さんが約百名、軍事教練を受けに來るんださうだよ』

『さうだ、それに違ひない。選抜されると、そいつの助教か、氣合がかゝるな、全くどうも』
『何しろ、何と云つてもそれは俺か一番適任だよ、第一俺はどこへ行つても婦人には受がいゝんだ』とそれぞれ自己宣傳をやつてゐる。
いよいよ相談一決。誰と云ふ事なしに、二年兵全部が申し出る事になつて、一列側面縦隊で、班長室の扉の前に並んだ。
ところが、どうした事か、今夜に限つて、班長殿はもう寢臺の中で高鼾である。
一同がつかりした。折角帶劔までして、氣合かけたのだから無理もない。
とにかく明朝にする事にしてその晩は興奮し乍ら消燈、寢についた。
翌朝點呼のとき、
『フジン教育は熱心なお前達から一人だけ選抜する。全部と云ふわけにはゆかんので誠に氣の毒だが仕方がない。
春山は、今日から午前八時迄に銃工場へ行く事になつた。時間が一時間程早いから遲刻しない様にしろ』

『フジン教育を受けるのだ。各中隊から新しい被教育者が出てゐる筈だ、お前も中隊から、選抜されたのだから精出してやれ。
フジン教育に就いては向ふへ行つたらよく解るから、早く支度をして行け』
春山は得意になつて、

『班長殿、春山は中隊の名譽にかけて、一生懸命にやります。
春山はこれからフジン教育に銃工場へ行つて參ります』
いそいそと支度して出かける春山に戰友の山下が、
『おい、い、な、羨ましいな、うまくやりやがつたな』
『ウン、すまんが日頃の心掛けがい、からな。行つてくるよ、昨夜、ヒゲをするのを忘れたのが殘念だがな』

と、こそこそ話してゐる。

春山が行つて了つてから、班長が一同に云つた。

『お前達はフジン教育と云ふと、何と思つてゐるか、おそらく婦人、女子と思つてゐるのだらう。ところが實はフジンとは刃を付けると書く、銃劍に刃をつける教育なんだ解つたか、ハ、、、、ハ、、、、。

昨夜はみんな、帶劍までして申し出て來た樣だつたが、どうだみんなさう聞いても申し出るかハハハ』

一同啞然として笑ふのも忘れてゐる。

班長が歸つてから暫くすると、破れる樣な笑聲が班長の耳に入つて來た。班長は下士室で一人でクスクス笑つてゐる。

內務檢査の前夜

山野上等兵の寢臺列びに山元といふ、無頓著で而もかなり橫著な初年兵が居た。

聯隊內務檢査があるといふ二日前の日夕點呼の際、班長が襦袢袴下の手入修理の檢査をしたが、山元の襦袢は取り分け汚いので、班長は彼の無頓著を嚴しく叱つた。

そして同時に其寢臺列の長である山野上等兵にも其指導が悪いといつて注意した。

山元は翌朝、早速其襦袢を洗濯して物干場に乾して置いた。

夕方演習から歸つて襦袢を取り入れに行つて見ると、どうしたことか自分の襦袢がない。

彼は狼狽して其邊に殘つてゐる襦袢を一々調べて見たが皆他人の記名がしてある。——考へて見ると彼自身のは記名することも忘つてあつたのだ。

彼は一通りの心配ではなく目の色を變へて今度は隣りの中隊の物干場へ飛んで行つた。そし

て片端から探して見たがあらう筈はない。

愈々血眼になつて次から次と他中隊の物干場をあさつてみたが、もう多くは取りかたづけられたあとで何も殘つてはいない。

薄暗らくなつた頃、彼は打ちしをれて歸つて來た。さすがの横著者も明日に迫つてる檢査の爲には餘程心配らしい。

日夕點呼の時、班長は翌日の受檢要領や檢査の目的等を說明してから山元に問うてみた。

『山元、お前は襦袢を洗濯したか、表記も入れたか』

山元は鋭い班長の視線を避けるやうにして、

『ハイ、完全に終りました』と一時逃れの返答をしてしまつた。

班長が立ち去つたあと、山野上等兵は念の爲に、

『山元、貴樣の襦袢を檢査するから、持つて來い』といつた。

サア山元も之れには困つた。そして暫く變に顏面神經を震はしてるたが、たうとう耐へきれなくなつて大きな涙を浮べ乍ら其事情を述べた。

山野上等兵は今更のやうにあきれた。

『貴樣は班長に虛をいつたな。どうしてお前は眞實のことをいはなかつたのだ。明日の檢査はどうして受けろ積りか。……本當に情けない奴だ』

怒りと憐憫の情に餘つて山野上等兵の聲は震へてるた。

『オイ山元、たつた一枚の襦袢だがな、軍隊ではそれが嚴重なんだぞ。

それに明日は檢査だといふのに、もうとても融通がつきやしない。

あゝ、俺は自分の寢臺列の者が叱られたり、毆られたりするのを見ちや居れないのだ』

山野上等兵の眼からは涙が出て來た、平素から彼は、自分が初年兵であつた過去一年を顧みて如何にして初年兵の爲に眞の兄たらんかをいつも考へてるたのであつた。

そして山元の性質に就ては、何とかして之を直してやらねばならぬと日頃苦慮してゐた。

ところが今此の急場に方つて彼自身も殆んど途方に暮れて了つた。その上山元が明日の檢査に叱られるのを思ふと、自分は居ても立つても居られない氣がするのであつた。

消燈喇叭が鳴る頃、彼は何事か決心したもの、樣に、ひそかに山元に對して云つた。

『俺が何とか探してやるから、早く息め』

彼は最早や人ごとでなく穩かにものをいつた。

『ハイ』

といつて山元も仕方なく寢床に就いたが、氣がとがめるせるか、ウト〳〵とするばかりでなかなか寢つかれない。

フト山元は夜中に目を醒した。

誰か、班の一隅でバケツに水を入れて何かを洗つて居る音がするハッと思つて目をこすり乍らよく見ると、それは山野上等兵である。

『上等兵殿、何をして居られますか』

『いや何もして居ない。もう十二時半だよ、早く眠らないと、明日睡いぞ』

何氣ない如く山野上等兵は答へた。

腕時計を見ると、成程十二時半だ。

山元は襦袢のことや、上等兵の樣子が氣にかゝつて、それからはなほの事眠れなかつた。

そして山野上等兵が一體何をしてゐるのか餘り不思議なのでソット毛布の中から眠つたふりをして見てゐた。

軈て洗ひ終つたらしい上等兵は一枚の襦袢を堅く絞つて、敷布の下に敷き込んで床に這入つた。

○

翌朝、愈々檢査の當日である。起きるとすぐから班内は整頓や配置の準備に大多忙を極めた。

山元は夜半のおぼろげな記憶で何かにつまされたやうな格構をして、それでも人並に整頓や何かにとりかゝつてゐた。

フト見ると、自分の整頓棚の上に生乾きの襦袢が一つ置いてある。

そしてしかもそれには自分の氏名すら、ちやんと記入してあるではないか。

彼れは直覺的に、昨多山野上等兵が何をしてゐたかを悟つた。

――あゝこの怠け者の自分に斯くまでしてくれたのかと思ふといくら横著者の彼でも電氣に打たれたやうに感激して、感謝の涙に咽ばざるを得なかつた。

○

その事があつてから間もなく山元の態度は見違へる程變つて來た。

彼は内務に演習に人一倍精を出して勉強した。

そして第一期檢閲を無事終了してから彼は優秀な成績で上等兵候補者に選拔された。

彼れの他、山野上等兵の班からは中隊の約半數の上等兵候補者を出した。

彼れの班には又私的制裁といふものが絶對に行はれなかつた。

誰もかも競うて奮勵努力するので班の成績は際立つて優れ、班員はそこに云ひしれぬ滿足と誇りを感ずるのであつた。

殿、閣下問答

『高松、師團長の官姓名を云つて見ろ』

『ハイ、陸軍歩兵中將松井二郎閣下であります。』

『その次』

『ハイ、陸軍歩兵、モトヘ、陸軍中將松井二郎閣下であります。』

『ヨシ、その次、旅團長』

『忘れましたッ』

『次』

『忘れましたッ』

『みんな忘れたでどうするか、誰か』

『ハイ、山田、旅團長は陸軍少將山田正信閣下であります』
『山田なら忘れつこないナ、ハハハ、ヨシ次は聯隊長』
『ハイ、有田大佐閣下であります』
『いかん次』
『ハイ陸軍大佐有田茂作閣下であります』
『いかん、いかん、次』
『陸軍大佐有田茂作殿であります』
『いかん、いかん、次』
『ハイ、陸軍歩兵大佐有田茂作殿であります』
『ヨシ、聯隊長以下は兵科を云はんといかん、わかつたか。
それから、將官には歩兵とか砲兵とかの兵科は云はんのだ』
『班長殿』
『何か』

『自分は陸軍歩兵二等兵殿でありますが、誰からも殿はつけられんであります』
『バカツ、自分で殿をつけるやつがあるか、二等兵は誰よりも階級が下だから殿はつけんでいい』
『ハツさうでありますか、解りました。』
『班長殿』
『何か』
『自分も早く殿と云はれたいのであります』

叱られて褒賞休暇

S聯隊長は毎朝出勤して來ると直ぐ乘馬のまゝで一巡營内を視察するのを常としてゐた。
先づ各中隊の舍前舍後から炊事場、倉庫前等を經て酒保のあたりまで來ると、一通り其日の

軍紀風紀の如何が察知されるので、聯隊長は人知れず滿足らしい笑をたゝえたり、或時は不機嫌に眉をそばだてるのであつた。

此日は何事があつたのか、聯隊長の面持ちは餘り香しくなく、馬の手綱をキリツト締めて體操場の方へと速歩の歩を進めて來た。

そこにははや某中隊の初年兵が上衣を脱いで、小春日和の暖い陽を背に受け乍ら體操をやつてゐる。

『氣を附け――』

教官が俄かに緊張した號令をかけ、報告を終ると

『ヨシ、直ちに初年兵をこの周圍に集めよ』との命令だ。

何事があるのかと一同片唾を呑んでゐると、聯隊長は徐ろに――

『お前達はこの兵營を圍んでゐる堤防を何と心得るか、刑務所の圍ひとどこが違ふか？』

一同突然のこの異樣な質問にあつけにとられてゐる。

『その兵』と聯隊長。

『ハイ、それは……』

『それはどうした？』

『ハイ、それは……刑務所のは皆煉瓦塀でありますが、聯隊のは土で出來た堤防であります、終り』

『フフーン、まだ他に？』

『ハイ、刑務所のは看守がついてゐますが、聯隊のは歩哨が守つて居ります、終り』

『まだ他にないか』

『……』

『一體お前達は、その位の相違としか認めないのか。

刑務所の圍ひと聯隊の圍ひとは根本的に違ふのだ。

刑務所のは中から囚人が外へ逃げない爲に設けられてあるのであるが、聯隊のは之と全く反である。外から地方人が勝手に入れないやうにつくつてあるのだ。

お前達が外へ出ようと思へば、何時でも自由に出れる。こんな堤防を乘り越す位わけはない。

然しだ、お前達が勝手に外へ出れぬ樣に引きしめてゐるものは、軍紀である。目に見えぬ軍紀によつてお前達は初めて嚴肅なる生活を保ち軍人たるの本分を盡して行くことが出來るのだ。

軍人たるの本分を自覺してゐるものにとつて兵營は樂園である。

刑務所とは違ふ。

だからお前達は堤防の上に登つて娑婆をあこがれる囚人のやうな眞似をしてはならん。どうだ判つたか』

『ハーイ、わかりました』

○

其日の午後である。

聯隊の兵は全員聯隊講堂へ集合を命ぜられた。——聯隊長の訓示があるとのことで。

聯隊長は先づ軍人は嘘を口にしてはならぬ。嘘をいふ奴は軍人の風上に置くことは出來ぬといふことを懇々と訓された後、

『今朝九時頃乘馬で第二兵舍の舍前を見廻つて行くと、某中隊に寢臺の上に寢そべつてゐる兵があつた。

聯隊長さへ午前八時には出勤してゐるのに、一體何といふ態か最近大分軍紀が弛んで來たやうである。

誰か？　寢てゐたのは自分であつたといふものは手を擧げて見よ』

一同は靜まり返つて互に顏を見合はすばかりである。

『誰もないとすると或は聯隊長の錯覺であつたかも知れん、さうだとすれば誠によろこばし

い。だが聯隊長はまだ老碌はしてゐない筈である。

それから、第三兵舎の舍後の方へ廻ると、不意に二階の窓からバケツが落ちて來た。

聯隊長がハット思つてゐると、下の方で『オーライ』といつて受け取つてる兵がある。

聯隊長はやれ〳〵と思つてあきれた。

窓は物を出し入れする所ではない筈だ。

誰か此の中に心當りのあるものがあるであらう。よく胸に手を當てゝ考へてみい』

『ハイ、惡くありました。』

『ハーイ、惡くありました。』

と二人の兵が立上つた。

『ウン？　誰と誰か』

『ハイ、松本一等兵であります』

『ハーイ、岡田一等兵であります』

『よろしい。皆、松本と岡田をみよ、兩名は今さつき聯隊長が訓誡した嘘を言ふなといふこと

を言下に守つた。誠によろしい。

軍人は須らく斯うなくてはならん中隊長、賞めて置け。

二人の行爲はよくないが、今の精神は非常によろしい、軍人の手本である。

第九中隊長、寢臺に寢てゐた兵は班長をして徹底的に調べさせよ。

幹部候補生だけは殘つてあとは解散してよろしい』

候補生連中、何事かと居ずまゐを正してゐると、聯隊長咳一番

『諸官は先頃の日誌に、教官が諸官の人格を無視した云々とひどく氣にしとるらしく書いてあつたがそれは諸官の考が間違つてゐる。

こと軍事に關しては今の諸官は二年兵丈、初年兵にも及ばない。

階級によつて人格に差別のあらう筈はないが、教官の言つた人格は道德上の人格の意味ではない。そこを誤解せぬ樣に。

先づ諸官は一日も早く學生氣分を拔ける工夫をする事が肝心である。一日でも早く切り拔けるものが勝なのだ。どうか、解つたか』

『ハイ、解りました』

『よし、それだけ』

○

『聯隊長はエライよ、俺達に、諸官諸官と云つたぜ、何しろ、學生時分には大佐や中佐の教官から君、君などと云はれてたんだからな』

『おい、おい、その學生氣分がいかんと今、云はれたところだ、氣をつけろよハハハハ』

と、候補生連中大いに氣をよくしてゐる。

他にもう二人氣をよくしたのは松本と岡田の兩一等兵である。

叱られて、正直をほめられて、褒賞休暇を一日貰つたのである。

ニキビの悲哀

日夕點呼が終つたとき班長が、

『今から手箱の檢査をする、一歩前へ』

不意打ちの事で一同、ドキンとした。中にも二年兵の泉は一層ドキンとしたのだつた。

だがもう何としても駄目だ。

異狀なく他の連中は通過した。

『オイ、泉、これは何だ』

『ハッ』

『變てこなこの瓶は何だ?』

『ハッ、美顏水であります』

『何、美顔水？　お前は役者か』
『ハッ、ニキビトリ美顔水であります』
『ニキビ、ニキビがあつて、恥しいのか』
『班長殿、自分はみんなから、ニキビと云ふアダ名を貰つてゐるのであります。何かと云ふと、ニキビ、ニキビであります』
『ハッハッハッ』一同は思はずふき出した。
班長もをかしさを堪へ、
『ニキビ位に負けてどうする。班長は、まだ若いのにこんなに禿とるぞ、毛生え薬などはつけはせんぞ』
これに又、一同爆笑だ。
『こんなものは早速棄てゝ了へ、いや班長が貰つとく、除除のとき返してやるからハッハッハ』
『オヤまだ、こんなものがあるぞこりや何ぢや、流行小唄集、泉、お前、こんなもので唄をゲイコしてをるのか。一つやつてみい』

『ハッ』
『やつてみい、この、一番始めの奴をやつてみい』
『ハッ、わたしのラバサン南洋の美人……』
『バカッ、お前はそんな唄を歌つてカフエーでいゝ氣持になつてゐるんだらう。ニキビとりなどもその爲に買つて來たんだナ。これも班長が預つておく。今度の日曜は外出止メだ』
泉はその晩、ニキビとりの藥を發明した夢を見た。

上等兵の歸省

『彦ちやんが歸つて來た』
この噂が忽ち、隣から隣へと、村一般に傳はりました。こゝは熊本縣の片田舎で戸數百に足

らぬA村です。

もう二三日で年が明けると云ふあわたゞしい時のことですが、この平和な村には時ならぬ騒はひが訪れました。

それもその筈、彦ちやんは村の大地主村長さんの獨り息子であり、今年の春、盛大なお祝ひをして村人は彦ちやんの入營を見送つたのでした。

その上野彦太が、年末休暇で、久し振りに郷里へ歸つて來たのですから、村長さんの宅は大騒ぎです。

しかも、伜の肩には三つ星、腕には山形の金線、伍長勤務上等兵と云ふのですから、父の上野彦平さんは禿頭を振り立て眼を細くして有頂天になるのも無理はありません。お母さんのお咲さんも、低い鼻を高くして、大盤振舞に轉手古舞をするのも尤もなのです。

床の間には早咲きの梅が大きな花瓶に活けてあります。

床柱を背にしてもう大分赤くなつた彦ちやん、上野上等兵が、

『何しろ入營以來約一年、初年兵時代の苦勞は誠にお話しにもならん位でありました。

村ではみなさんに御手數をかけましたが、軍隊では、何から何までもう一切自分の手でやらなければならないし、その上、自分は人の目につかないところまで氣を使つて、誠心誠意眞面目にやりました。

おかげで、かうして皆さんの前に精勵の結果たる上等兵の肩章をお土産にお見せする事が出來たのであります』

と、事細まかに、話すのであります。

村長さんはむろんの事、並居る連中も、さすが彦ちやんはエライもんだ、行くところへ行けば、立派なもんだと感心して居ります。

中でも村で評判の美人、松子さんは、彦ちやんのりゝしい軍服姿や、袖章の伍勤の金スヂに、少からず心をひかれると云ふ有樣です。——村にゐるときは、あんな怠け者の彦ちやんなどよりは貧乏でも田中の清さんの方がよつほどいゝとひそかに思つてゐたのでしたが。

○

郷て得意の絶頂にあつた上等兵は意氣揚々、村の人達に送れて再び兵營へ歸つて行きました。

村長さんはむろん、松子さんもその後姿を『何と頼もしいことだらう』と飽かず見送つたのであります。

『滿期になつて歸れば、軍人會の分會長、青年訓練所指導員といふ名譽の職が彦太を待つとる、松子さん、あんたも待つてくれるぢやらう』と村長さんは松子の顏をのぞき込みました。

○

明くれば元旦の晝頃。

田中清が、同じく年始の休暇でこの村へ歸つて來ました。

貧しい彼の宅ではお母さんが一人で清を迎へました。

『まあお前、その袖の所の赤いスヂは何だい、二つもつけて』

『ハ、これは精勤章と云つて、眞面目に仕事をしたものにくれるのであります。お母さん喜んで下さい。清はおかげで成績も中隊では先づ十番から下ではないのであります』

『まあ、それはそれは、死んだお父あんがお前の立派な姿を見られたら……

まあ、私とした事が年寄のくせに涙なんか見せて——

さあさあお母さんが丹精してこしらへたお餅、たらふく食べておくれよ』

『ハ、有難う。

ときに村長さんとこの彦ちやんも年末に歸つたでしよう』

『さう〳〵、村長さんとこでは、三日間祝ひ酒で村の人を呼んで、大賑ひぢやつた。

私もよばれて行つたがな、彦ちやんも大した變り樣で、何でも伍長勤務とか云ふので袖のところに金スヂが入つてゐたけがな、

お前は彦ちやんの樣に金スヂは貰へんぢやつたかい、何しろ村長さんは大喜びで、さうさう松子さんな、松子さんは彦ちやんが除隊すればお嫁にゆく事に決つたさうぢや、松子さんもい、聟どのをな』

『えゝ、彦ちやんが伍勤!!

そりやほんたうですか、それに松子さんが嫁にきまつた、

ほんたうですかそれはお母さん』

『ほんたうとも、ほんたうとも、お前、一所の隊で知つとらうがな』

『いやそりや何かの間違ひでせう。

彦ちやんは入營しても矢張り、村でゐるときと變りない悪けものですよ、自分の口から云ふのはをかしいですが、同村から彦ちやんの様な悪け者が來てゐるので肩身がせまい位です。

彦ちやんはまだ二等兵ですよ、お母さん、星一つですよ』

『えゝ、そりやほんとかい、

うかうかそんなこと云つて村長さんに聞えたらお前……』

『たしかです、それにしても彦ちやんはなぜそんな事をしたらう』

○

それが、いつとはなしに村長さんの耳に入つたから堪りません。

『そんなバ、馬鹿な事が、よし、隊へ行つて見屈けて來る、松子さんも一緒に來い』

と十里あまりの道を自動車を飛ばして驅けつけたのです。

さて衛兵所で面會を求めます。

『上野上等兵?

はて、私も六中隊ですが、中隊には上野二等兵ならゐますが……』

『上野彦太です、伍長勤務上等兵の』

『えッ、伍長勤務の? そんなもの居りませんよ、上野彦太ならば二等兵ですよ。炊事常當番やつてる。今呼んで來ます』

驚き立つてゐる村長を尻目に衛兵の一人は彦太を呼びに出て行つた。

暫くして、炊事當番から面會所へ來た上野二等兵、親父さんのうしろにゐる松子さんの姿を見てハツト驚いて急にしほれて了ひました。

『おゝ彦太、その、そのざまは何だ。わしはもう……』

上野二等兵の肩にはたつた一つ黄色い星が淋しくそれも汚れてあつたきりです。

陽氣な初年兵の手紙

おきくさん

約束の手紙を書かう書かうと思ひながら、なれないせるか、ひまがあるやうでない樣で、つひおそくなつた。

今日は日曜で、晝から、一寸ひまが出來たからこの手紙をかく。

今日は朝の中、軍歌を唄つたり、鬼ごつこしたりして、幼稚園へ行つた樣なものだつた。

もう五日になつた。始めは飯が油臭くて閉口したが、もう慣れた。飯もみんな殘さずに食べられる。

僕の仲よしになつた友達は熊谷の方の百姓ださうだが、そいつは、軍隊は樂なもんだ、野良仕事から比べると遊んでるのと變りはない。牛肉や、肴を食うて、飯も三度々々間違ひなく腹

一杯食へるし、その上小遣までくれるし、まるで極樂だとそんなに云つてるが、この男は悪い事には、洋服着たり、師團長の名をおぼえたりすることは不得手だと見えて、こんな事がないと一層いゝのだけど、まあいゝことばかりはないわ、不得手な方の事はあんた頼みまつせと僕に頼んだりしてるが、考へると、野良仕事よりは樂な事は間違ひない。

僕でさへこの分だとそんなに苦しい事はないが、まだ〳〵序の口だと思つてる。

慣れると云ふもんはおそろしいもんで、寢坊の僕が、ちやんとラッパの鳴る前から目がさめる樣になつた。

ちやんと軍服をつけて、星は一つだけれども、きちんとしたところは立派な兵隊さんだ。見せて上げたい。

月下葉に寢ね、十里白雪を蹴る、銃劍陽に光り、軍帽、風に躍る、なんて勇ましい文句を考へたが、まだ鐵砲のテの字の事も知らない。

せめて靑訓にでも行つとけばよかつたと思つたが後の祭だ。

どこへ行つても僕の茶目氣は抜けないと見える。

で、中隊のエライ人々のアダ名を内密でつけたからおしらせする。

まづ中隊長は平凡だがダルマさんだ。まだ禿げる年でもあるまいが半分ぐらゐ毛がない。そして顎や頬はヒゲだらけだ。

ついでに云ふがどうも軍人は禿が多い様だ、エライ人は大てい禿けてゐる。

宅の親爺なんか、軍人になれば禿け振だけでもエライもんだ。

サンマと云ふのは中尉さんだ細長いところもさうだが、顔がサンマにそつくりだ。

お次はブルドッグだ。これは特務曹長だ。中隊では今迄青鬼と云ふんださうな。矢張り昔からそれぞれあると見える。僕は自分一人でどうしてもブルと決めてゐる。

班の上等兵はアンパンとつけた。

アダ名ばかり書いては悪いがみんないゝ人ばかりだ。僕はまだ来たこと

叱られた事がない。尤も五日やそこらで叱られては先が案じられると云ふものだ。

熊谷のお百姓さんはのんとうとつけた。のんきなとうさんだ。

こゝまで書いたらのんとうが酒保へ行つて見ようとやつて來た。

始めて酒保へ行つて見る事にする。ではこれで。

今度面會に來るとき越中を三ッ程たのむ。キャラメルも少し。さよなら。

それから、千人縫なんか要り相もないから、あわてゝ作らなくてもいゝです。

陸軍歩兵二等兵　長瀬正夫

軍旗歩哨

兵舎の屋根も營庭の樹々も今日は總て新しく粧をこらした様に見える。

萬象皆新しい喜びに輝いてゐる中に、わけても今日の表門の歩哨花岡一等兵の瞳は眞に更

生の意氣と喜びに滿ち〳〵てゐる。

へんぽんと飜へる營門の國旗の下で花岡はさつきから異常の緊張を續け乍ら立哨してゐるが、急に何事か想ひ出して大きく背づいてニッコと微笑むのであつた。

今日は一月元旦だ。

○

花岡はこれまで殆んど懲罰ででもあるやうに、いつも何か厳ある樂しい日に限つてきつと衛兵か又は中隊の當番に當てられて來た。

それでなくてさへ、性來少しくひねくれてゐて、何かといふと不平や反抗心の絶えたことのない彼は、ムシヤ〳〵する心を押へきれなくなると、きつと酒保へ走つて酒を呑んだ。

彼は同じ初年兵の前で時々穏ならぬ言葉を吐いた。

『上官が何だ同じ人間ぢやないか……』

こんなことをいふ時彼は比較的眞面目であつた。そしてしまひには戰爭や軍備のことに就てまで彼一流の勝手な批判や理窟を竝べて惡宣傳をするのであつた。

學力は低いが感受性が強く、而かも東京の下街の貧しい境遇に育つた彼の思想は入營前から幾分惡化してゐた。

それが軍隊教育によつて矯正せらるべき所不幸にして彼の性格の弱さは却つて之を益々尖鋭にして行つたらしい。

○

十二月十九日——聯隊にとつて最も目出度い軍旗祭の日である。

花岡には軍旗の尊嚴や、軍旗祭の意義などは到底理解出來ないが面白く餘興でもやつて樂まうといふ心だけは一人前にあつたらしい。

彼も亦假裂行列の一人に加はるべく何處からか借り込んで來た女の衣裳をしきりにひねくりまはしてゐた。

ところが其前々日の點呼の際に花岡は突然軍旗祭當日の軍旗歩哨に服務すべき命令を受けた。

納まらないのは當の花岡だ。（又しても軍旗祭當日の衛兵とは何事だ、此前の日曜日も當番

だ――餘り人を馬鹿にしてゐる……。）

彼は唇を噛み異様に眼を光らしてゐる。

命令を傳へた班長は穏かにつけ加へた。

『花岡、お前の勤務は特に中隊長殿の命令だ、御苦勞だが、よく間違ひない様に服務しろ、そしていづれ夕方下番になつてからゆつくり遊べ』

花岡は返事もしない程だつた。

さて軍旗祭の當日である。

式が終了した後、軍旗は營庭の中央に設けられた祭壇に奉安せられ、花岡は其前に立つてゐた。

ラウドスピーカーを通じて賑かな音樂が流れて來る。

ドーン、バラ〳〵ッと威勢のいゝ煙火が鳴ると同時に向ふの方の餘興場からドッと歡聲があがる。

笛、太鼓、喇叭、空砲、拍手、人のどよめき……

『チエッ、馬鹿臭い……』

花岡は例の剽輕な三浦や森が、身振りをかしく假裂行列をやつてゐる情景を想ひ浮べ乍らボンヤリ空の方を向いてゐる。

と、ヒラ〳〵と風に搖れる裝飾の萬國旗が自然に目に映つて來る。

アメリカ、イギリス、フランス、支那、……其他色々あるが何處の國のか解らない。

日本の旗は？　と思つて數へて見ると、一つ……二つ……三つ……

成程かうやつて何十種類とある各國の旗の間に日本の旗を見つけると何とはなしに懷しさを覺えた。

ふと見ると花岡の前で五ッ六ッの男の兒の手を曳いた十二三の女の子が

『キイちやん、軍旗だよ、おじぎしな』
『姉ちやん、これギンキ、お詣りするの？』
『ア、軍旗だよ、天皇陛下の軍旗だよ、をがむんだよ』
『さう？』
花岡は聞くともなしにこの二人の子供の話を聞き殊に其の幼い子供のおじぎする姿を可愛いと思つた。
尤もさつきからかうして立つてゐるといろんな人が此前に來ては叮嚀におじぎをして行つた。
だがこの幼い子供の會話と姿だけは何か心に殘るものがあつた。
又子供を一人つれた親爺がやつて來た。
『あゝ何時見てもボロ〳〵だが、もつたいないもんやな、
名譽の軍旗だ、此軍旗の下で何人の兵隊さんが死んでさつしやるか判らない。
ホレ坊やよく見といておじぎするんだ。坊やも大きくなつたら兵隊さんになるんだぞ、そし

て軍旗もつて戰爭に行くんだぞ。早く大きくなんなよ』
二人は叮嚀におじぎをした。其時花岡は何か間が悪くて何時の間にか不動の姿勢をとつてゐた。
續いて、青訓服を着た五人の一團が來て號令の下に最敬禮をして行く。
赤ん坊をおんぶしたお内儀さんがおじぎをしてから更に手を合はして拜んで行つた。
次で印半纏を着た職人らしい二人伴れが來た。
女給風の女が來た。皆おじぎをして軍旗をたたへて行つた。
花岡はこの多くの人々の尊敬の的となつてゐる軍旗を護衛して自分が何か特殊の光榮を擔つてゐる樣にいつの間にか感じてゐる自分に氣がついた。
そしてたまに軍旗の前へ來てもおじぎもせず素通りして行くハイカラ紳士や氣取つた女などを見ると何となく生意氣だといふ反感が起つて來るのをさへ感じられた。
その上、今更の如く昨日中隊長から話された軍旗の尊嚴のことや我聯隊の歴史のことなどの斷片にひし〳〵と思ひ當るのを覺えて、彼は何か靈感に打たれたものの樣に緊張して思はず身

を震はした。

○

それから後の彼の心は遽かに轉向して行つたのだつた。

『新年から、元旦から……』

彼は何事か心の中に強く契ふと共に、自分をあの時殊更軍旗歩哨に選定してくれた中隊長の心づかひや命令を有難くさへ感ずるのであつた。

『あゝいゝ日本晴だ、いゝお正月だナ』

花岡は思はず眉を上げて空を見上げた。

はかない威嚴

今晩、泊るところはどんな所だらう。

若い娘さんでもゐてくれゝばいゝが、などと蟲のいゝ考へは誰にでもあるものだ。

二人、三人或は四人と、それぞれ連れ立つて、宿舍票を持つて、厄介になる宅へと行く。

石田一等兵の宿舍には案の定、年頃の娘さんが

『お疲れで御座いませう、さあ御遠慮なくどうぞ。井戸はこちらです、御案内しませう』

と親切なもてなしに、ひるまの疲れも一べんに消えて了つて

『はい、自分らは銃の手入れをしたいのであります。どこかこの縁側でもよくありますか。おいみんな、こゝで銃の手入れをやれ、それが終つたら、足を洗へ』

宿舍長の石田一等兵は二年兵の威嚴をたつぷり示し大威張りで命令をする。

『まあ、鐵砲のお掃除は後でもよろしう御座いませう。御飯でも上つてからにしては』

『いや、自分らは銃が生命であります』

『おい、みんな、今日は空砲をたくさん打つたから、よく掃除しろ、それから靴の手入れも充分やれ』

ます〳〵軍人精神を發揮する。

その實、早く風呂にでも入つて、一杯やりたいものと思つてゐるのだが、娘さんの手前、大いに、兵隊さんの面目を見せざるを得ない。

『今日は、まだ明るいから、銃口檢査をやる。みんなそのまゝの服裝でよろしいから、そこへ集れ。』

日頃、檢査をされるばかりで、する方の立場になつた事がないところをこの時とばかり宿舍長大いに氣をよくし娘さんを横に置いて少くとも小隊長位のつもりでゐる。

この小隊長殿、部下三人を並べて一齊に銃の檢査を始めた。

『立射の構へ！　銃！』

ガチャ、ガチャ、遊底をひらいて三人の小隊は一齊に銃口を差し出す。

『ウン、お前はなか〳〵手入れがよろしい、よし』

『おい中村、腔線が黑いぞ、もう一度やり直せ』

『よろしい、概してよろしい』

大眞面目に銃の檢査を終る。

『まあ、ずゐぶん、けんかくなんですね、ほんとに、もうお風呂もちやんと沸いてゐますから』

宿舍長、娘さんからエラク見て貰つて一寸胸を張り

『何、これしきの事、まだまだ自分らはもつと苦しいことが澤山あるです、併し、どんな場合でも銃の手入れは最先にやるのです』

そこへ、突然やつて來たのは中隊の軍曹。

『おい、石田一等兵、お前は衛兵に今夜行くんだ。

さつき云ひ忘れたからすぐ事務室へ行け』
と云ひ棄てて行つて了つた。
サア此の小隊長殿、今迄の元氣はどこへやら忽ちベソをかき乍ら、娘さんに
『自分は今夜衛兵に行くのであります。御きけんよろしく』
御きけんよろしくはどうも要らないと思ふが、石田にして見れば全く、もつと何か云ひたかつたに違ひない。
それでも行く間際に
『二年兵殿御苦勞であります』
と初年兵達に云はれて
『お前達俺がゐなくても軍紀風紀を亂してはいかんぞ』
と最後の威けんを見せて、娘さんにはテイネイに擧手の禮をし、さてこの愛すべき小隊長は銃を擔いで出かけて行つたのである。

殘飯受難

『おい殘飯　そんなところで何してゐんだ、ばかに沈んでゐぢやないか』
『ハイ……』
『ハイぢやない、何してゐんだ』
『ハイ、自分は月を見てをるのであります』
『何、月を。バカ!!　もう點呼だぞ、早く班へ歸れ、豚の月見なんぞとんだシャレだ、ハハハ』
『豚に眞珠とはこの事だなあ、ハハ』
酒保で一杯きこしめした二人の古兵は歸りしなに炒事場の側の薄暗がりに一人佇んでゐる太田初年兵をからかつて行つた。

太田は月を見るどころか、悶々の情に堪えずさつきからこの欄の邊をさまよつてゐたのだ。

身體が人一倍大きい上に、氣の弱い彼は入營以來「豚」と云ふ綽名をつけられてゐたのだが近頃はそれが「殘飯」と云ふ、世にも香しからぬ異名に代へられて中隊中のものから輕蔑される樣になつた。

それにはわけがあつた。

彼としては自分がやつた行爲は決して恥づべきことではなく、寧ろ立派な動機からやつたことで、賞められても然るべきだとさへ思つてゐた。

それなのに、此の思ひがけない結果を招いてホト〳〵浮ぶ瀨がない狀態だつた。

晝間も二年兵から、

『貴樣は中隊の恥つさらしだぞ』

と毒づかれたし、又夕食の時には誰かゞ

『オイ殘飯、飯が少し殘つたからやるぞ、これを喰へ、他中隊からなんぞ貰はないで』といつたので皆のものがドット笑つた。太田は穴があつたら這入りたいと思つた。——

入營前、杉浦先生から『眞面目に正直にさへやれば軍隊は極樂だ』と云はれて、そのつもりで一生懸命眞面目にやつて來たんだ。

それだのに……あゝいやだ〳〵。もう軍隊にゐるのは一日もいやだ。——

さつきからあれやこれやと迷ひぬき乍ら彼れは人目のない欄のあたりを行きつ戻りつしてゐる。

『もう一その事班へ歸るまいか』

と思つてゐると、かすかに兩親の顏や先生の顏、或は中隊の大騷ぎをやる有樣等々が次々に頭の中を往來する。途端

『トトタツトトタツタタ……』

と點呼ラッパがいきなり耳を劈いた。太田の足は其場に釘づけになつた。と次の瞬間太田は無意識に駈け出した、そして早駈けで班の方へ。……

○

一方、班では、太田が點呼前に歸つて來ないので

『どうしたんだらう、あいつ、又殘飯漁りでウロウロしてゐんぢやあるまいな。それとも便所か』

『先刻、狹窄射擊場の裏の方でウロウロしてたのを見たぞ。誰か行つて來い。

ゐるもんだと思つて氣がつかなかつたがもう五分しかないぞ、大急ぎで探して來い、一人は炊事場の裏の方から一人は酒保の方から廻つてゆけ』

點呼前にゐないもんだから、班内大騷ぎをやつてゐる。

『まさか、あいつ脫營する樣な事はあるまいな。近頃、樣子が少々變だつたが、おいみんな、あいつをからかひ過ぎたんぢやないか。

横山、藤原なんざ責任があるぞ』

『俺達ばかりのせゐにしやがつて、さう云ふお前は殘飯の名づけ親ぢやないか。

責任ならお前が先づ第一だ』

班の連中些か不安でもあるし、からかつたひけ目で、早く歸つて來てくれゝばいゝがと内心ビクビクしてゐる。

窓から首を出してた連中、

『やあ、大變だぞ、ラッパが衛兵所を出たぞ』

『どうしたんだ、大急ぎでもう一隊出て行け』

班長も何事かと出て來て太田の事を聞き、何故もつと早く云ふて來ないかと自分も探しに行かうとすると點呼ラッパが鳴り出した。

それと同時に太田を迎へに行つた連中が太田と前後して息をきつて駈け込んで來た。

幸ひに週番士官はまだ他中隊にゐるので、點呼は事なく終つた。

その後で班長は太田を下士室に呼んで今日のわけを聞いた。

太田は涙を流し乍ら

『班長殿、太田はみんなに御心配かけて申譯ありません。
自分は日頃、殘飯、殘飯と呼ばれて悔しくてならないのであります、今日もつくづくもう嫌になるのがいやになつてしまつたのであります。
自分は學問がないからみんなに馬鹿にされるのであります。
班長殿、自分はそれでも一生懸命眞面目にやつてゐるのであります』
『うん、お前の眞面目にやつてゐる事は班長はよく知つとる。
だが殘飯と云はれるのには何かわけがあるだらう』
『はい、それはこの間の野外演習から歸つた晩、どういふ間違ひであつたか班長當番の大石かゐないので誰も班長殿の御飯をつけるのを忘れて了つて、氣がついて見るともう飯がないのであります。
それで皆が爭つてゐましたが自分は躊躇してゐる場合でないと思ひましてとりあへず自分の分を差上げたのであります。まだ手をつけないのでありますからキレイなのであります。
ところが自分は班長殿も知つて居られる通り、大きな身體ですから、一食抜きにしますと、

お腹が空いてたまらなくなつたのであります。
辛棒してゐればよかつたのでありますが、食器洗ひに炊事へ行きましたところ、丁度他中隊のキレイな殘飯が少しありましたからそれを斷つて貰つたのであります。
そしてこつそり炊事場の側で食べてゐるところを、中隊の吉田二年兵殿に見つかりました。
「何だお前そんなところで、殘飯など食つてやがつて中隊の恥さらしだ」と叱られました。
それから自分はみんなに殘飯々々と云はれるのであります。
自分は班長殿に御飯を誰も上げないから、自分のを持つて行つたので、決して惡い事とは思つてをらんのであります。
たゞ自分が辛棒してゐればよかつたのであります……』
太田はボロボロと大きな涙が落ちるのを拭ひもしないで立つてゐる。
『さうか、そんなわけだつたか、
お前のやつた事は班長には誠に有難いことだ。その爲に殘飯の汚名を貰つて班長はお前に濟まんと思ふ。

だがさう云ふときはこれからかくさず云つて來なくちやいかん。い、事をしてもその後で自分が困る樣ではそれが却つて仇になつて了ふ。

お前の心掛けは立派なものだ。上官の爲を思ふ眞心、その眞心がやがて中隊全員の上下の融和のもとになるものだ。それにわけも聞かないで、お前をからかふ連中は、中隊全員が兄弟である事を知らん連中だ。

一人の失敗は罪つてやつてこそ兄弟の誼だ。

よし、よし、みんなにはわしから話してやるから。心配せんで、今迄通り眞面目にやつておれ、お前の眞面目な、上官を思ふ美しい心がけは中隊長殿にもわしからよく云つておく』

太田は班長のやさしい思ひやりのある言葉に、又もこみ上げて來る涙を押へきれなかつた。

あくる日、中隊全員の前で、中隊長からも又懇々とこの事件に就ての訓話があつた。

太田はその後誰からも、殘飯と呼ばれた事はなかつた。

色氣を出せ

舍後のコスモスが昨日の風に倒れても、首を持ち上げて花を咲かせてゐる。

赤とんぼが靜かに翅を休めてゐる。

班の窓に眞紅な夕燒が映つて、このひとときは、班内は寢臺が默々と靜寂の枕を竝べてゐるばかり。

ドンドンドンと階段を昇つて、平茶君を先頭に、S君、K君の連中入浴からタオル片手に歸つて來ると、一時に班内は賑かになる。

『秋季演習の××山の厳候は、全く生命がけだつたよ、まあ、俺だからよかつたもの、、他の連中ならもの、役にも立ち申さずと云つたところだつたぜ』

『バカ云へ、貴樣なんざ、××河の徒涉の苦勞を知らんからな全くあれこそ生命がけだつた

よ、それでも、銃劍すら濡らさずに、ちやんと任務を果たすたんだ、奇略おそるべしだぞ』

『船でも雇つたんだらう』

『そんな呑氣な事が出來るものか 計は密なるをよすとすだハハハハ、何れそのうち種明すをやつてやるよ』

『どうだ肉うどんでも襲撃するかみんなで』

い、氣持で大聲に喋舌つてゐる。

突然

『氣をつけ』牛の一聲。

不動の姿勢に、見れば班長殿の御入來各自の整頓をじろじろ見廻はして、さて

『演習も終ると、みんな氣を拔いて、整頓も稍々だらけて來たようだ、氣をつけろ』

と云ひ乍らふと佐藤の頭を見た班長殿

『おい佐藤、お前の頭は何だ、顏の方もひどいぞ、豫備兵と間違へるぞ、外出の時ばかり、色氣を出さんで、少すは常日頃も、色氣を出すてはどうぢや』

『はい、班長殿の御言葉、痛切に感ずます、今後色氣を出すます、であります』

『ふん、大分元氣だな、時に、佐藤は東北の樣でもあるが、生れはどこだつたかな』

『ハイ生れは、生れはと……』

『自分の生れたところを忘れたのか』

『忘れませんが、一寸その』

『何だそんなに生れがややこすいのか』

『はい、ややこすいのであります。生れは、福島縣で、いや佐藤は、生れるとすぐ山形に行き育てられ、然し本籍地は仙臺で、現在は岩手縣であります、て、家庭上惠まれて居ります。終り』

聞いてゐる連中、ブツと吹き出した。

佐藤もともに大口あいて笑つてゐる。班長再び佐藤に

『佐藤は笑つてゐるが何がをかしいのか』
『はい皆が笑ひますから、笑ひます』
『馬鹿、皆がお前を笑つてゐるのだ、それに自分を自分で笑ふ奴があるか』
『はい、今後注意致します』
『うん、とんだ時間を過すた』
『キヨーチーケ』
誰かの聲で、班長を送つてから、班内は波打つ笑ひの渦巻きだ。
『やい、佐藤、色氣を出せ、色氣を出すた方がいゝぞ』
『家庭は惠まれてありますか、道理で、貴樣は色氣がないと思つたよ』
『何、佐藤のやつは、色氣を出すても艶消すだからな、(わたすのすうちやん)なんかやつてみろ、をかすくつてなハハ』
『おい佐藤、そんな顏付すて、隅つこの方にすすくまらないで、やつてこいよ』
『俺はちつともすゞんではおらん。色氣を出すては女房にしまんと思つて考へとるんぢや』

一同又ワッハッハッハ。

召集兵の入倉

夢ではないかと幾度も幾度も考へて見た。だがそこはやつぱり薄暗い營倉に違ひなかつた。現役時代かつて自分は一度さうした營倉入りを監視した事がある。この中にゐる者はまるで人種が違つてゐる者の樣に思つて見たのだつたが、今自分がその中にゐるのだ。何と云ふ情けない事だ。

召集兵の山岡上等兵は自責と焦燥と懊惱とに疲れ切つた頭をがくりと低れた。

○

山岡はもう三日で召集解除になる筈だつた。その三日前の日に檢閲の豫行演習があつた。分隊長として第四砲車の指揮をとつた山岡は、中隊長の意圖の如く演習を終つた。

中隊長からは、現役兵に何ら遜色がないと賞められた。
厩から班に歸つて來ると、手入れを終つて歸つてゐる四分隊の砲手達が愉快さうに
『今日の首尾はどうだい、自分乍らうまく出來たと思つたよ、昔とつた杵柄だ、中隊長が感心するのも無理はないぞ愈々明日は檢閲だ、しつかりやらうぜ、山岡たのむぞ』
と川畑や森が口を揃へて云ふ。
山岡は分隊の者が喜んでゐるので實際うれしかつた。この分なら隊のときは進級するだらうとひそかに思つた。
むろん明日の檢閲も自分が分隊長だらう。みんなのこの氣合なら今日以上にやつて見せられるぞとニコ〳〵して、
『明日もたのむぞ、いよ〳〵最後だ』
『さうだもう三日だ、前祝ひに酒保へ突擊!!』
『オーライ前進』
山岡もむろん駈出した、四分隊一同點呼まで飲んだ食つた。

點呼後命令の後で週番下士の瀬川軍曹が明日の檢閲編成を達した。
山岡は第四分隊長は自分に違ひないと返事のハイを用意してゐると
『第四分隊長 川畑上等兵』
『ハイ川畑第四分隊長』
『二番砲手山岡上等兵』
『ハイ』蚊の鳴く樣な生ぬるい返事だつた。
『山岡それは何だ、ハツキリ復唱しろ』
『生云ふナ青二歳』餘期した分隊長を命ぜられなかつた不平と、現役時代に教育した初年兵が何を云ふかと云ふヘンな氣持が、酒の醉ひでつひ思はず聲に發して了つた。
『山岡もう一度云つて見ろ』
週番下士がドンと胸を突いた。
血迷つた山岡は押された拍子に「生意氣ナッ」と云ふや頰をグアンと一つ、下士も「コイツ」と撲り返へす騒ぎに六班の方に行つてゐた週番士官が飛んで來た。

酒癖の悪い山岡はかうなると何もかも解らなくなつて士官にまで食つてかゝる始末。

何とかして宥めようとする戰友も手がつけられなかつた。

○

（酒のせるか、いやそれも自分の慢心からだ。分隊長になると自分勝手に決めてゐたんだ。豫行演習で立派にやれたのだからその次は他の者がやるのが當り前だ）と青ざめた山岡は昨夜の始末を反省してゐた。そこへ足音が……

『山岡君……』

『瀬川君いや瀬川軍曹殿面目ない……』

と目を見會はせて默つた二人の耳へ控衛兵室から

『やあ一大隊が愉閲に出て行くぞ』と云ふ聲が聞えた。

『あゝ今日は愉閲だ……』

ハットした山岡は瞬間誰に云ふとなくつぶやいてガクリと再び頭を低れた。

瀬川軍曹はそのまま何も云はずに立ち去つた。

肉彈の臭擊

拂曉戰がこれから始まると云ふので、小隊は大隊の豫備隊になつて密集のまゝ森蔭に休止してゐる。いつ前進するか解らないが、連日不眠不休、要領よくみんな背嚢のまゝ仰向けになつて、コツコツ雜談をやつてゐる。

秋季演習五日目頃になると、暇さへあれば、ゴロンゴロン引くりかへるのは無理もない。

突然、奇聲を發したのが頓狂者の熊さん。

『くちやいぞ、くちやいぞ、誰だ、誰だ、奇聲をやつたのは』

『やあ、こりやたまらん。猛烈なやつだ』
『こいつはすごい肉彈だぞ、誰だ肉彈勇士は』

鼻をつまんで、毒ガスを除けてゐる連中を仰向けになつたままでフフンと笑つたのが、召集豫備兵のノッポ君。
『何だ、これ位の毒ガスで、騒ぐなど、見つともないぞ、そもそも屁は臭きをもつて貴しとなす、屁にして臭からずんば屁にあらずとちやんと内務書にかいてある。お前達は不勉強でいかん。とは云ふものの、少々臭いなう』
ノッポ君、すましてゐるものの、内心、臭撃に閉口してゐるらしい。

『エビリット、エビリット、瓦斯瓦斯』
又しても熊公奇聲を發してゐる。
『豫備隊前進！』
命令一下、臭いのも何も忘れて前へ前へ、やがて攻撃に參加、二時間あまりの戰鬪で漸くラッパが鳴る。
『休憩、朝食』
叉銃休憩、いよいよ飯盒下ろして飯だ。
小隊は程よい草地にみんな腰を下して一齊にバクつき始める。
「キャッ」と奇聲がするのは相も變らず熊さん。見れば飯盒抱へて横飛びに逃げ出してゐる。
その横にノッポの豫備さん、これは又苦蟲嚙んだ顏で悄然と飯盒を見つめてゐる。
どうした事かと更によく見れば、これは何とした事か、ノッポさんの飯盒に、ベットリと黄金餅が喰つついてゐる。
世にも悲しげな顏つきで、それを見てゐるノッポさん、氣の毒やらをかしいやら、連中、思

はず、頬ばつた飯をふき出して、爆笑又爆笑。

その上朝の屁の講釋を聞いてゐるのだからなほ更たまらない。洪笑の一齊射撃だ。

小隊長見かねて、

『中味は棄てて了へ、俺のやつを半分やるから。だが、一體どうしたんだ』

『ハイ、自分の奴だと思ふと臭くないであります。それに、中まではとほつてをりませんから、これを食べるであります。

實は、今朝自分が斥候に出たとき、つひ野放しをやつたのであります。處で、後で小隊と一緒に休憩した時、運悪く、いや運よくであります。自分のやつの上へ引くり返つたものらしく思ふのであります、自分でよかつたと思ふのであります他の人だつたら全く氣の毒であります』

とノッポ君、ノコノコそいつを提げて小川へ洗ひに行つた。後姿を見送つた熊さん。

『今朝の臭撃はさては、あのノッポさんの肉彈の臭ひだつたのだな奴さん、自分の背中に氣がつかないで、屁の講釋をやつてたんだハハハ』

爆笑又爆笑……。

瞬の上には、飛行機が、爆音をたてて飛んでゆく、ガスの尾を長く曳いて……

擬製彈に敬禮

いくら探しても見つからない。

野原二等兵はがつかりした。

明日は日曜外出する豫定で、友人にハガキを出しておいたのだ。

これぢや、明日の外出はフイになるかも知れない。

擬製彈一ッ位、なくなつても、そんなに大した事ぢやないではないか、無くする位に富熱中してゐたと考へれば却てほめてくれてもよささうなものだ。

野原は、誰もゐない練兵場で、一人ほまれを吸ひ乍ら、ぼんやり夕燒の空を見むかうに見える火藥庫の避雷針が反射してキラキラ光つてゐる。

あの中には實彈が澤山あるんだ戰爭の時は藥莢なんか拾つてる暇もない、どん進み、射つては進みだらう、全くバカバカしい。

擬製彈一ッで練兵場を這ひ廻つて探すなんて……。

もう歸らう、これだけ探して、ないんだから、自分の盡すべき事は盡したんだ。

班長殿も大目に見てくれるだらう。明日の外出が駄目になつたら悲觀するが……。

野原は立てつゞけにほまれをふかしてゐたが、思ひ切つて歸る事にした。

一緒に探す樣に殘された戰友の中村二年兵はさつきからずつと既設散兵壕でいゝ氣持で顏帽子をきせて、ねこんでゐる。

『二年兵殿、二年兵殿、もう歸りませう』

『やあ、さうか、あつたか、歸らう歸らう』

『ないのでありますが、野原は歸つてもいゝと思ふのであります、それに探すだけは充分探したのでありますから』

『さうか、ないものはない、いゝだらう、歸らう、もう夕食だ』

中村二年兵も呑氣相に云ふので野原も幾分安心した。

『おい野原、歸つても俺がねてた事は默つてろ』

『ハッ、一緒に方々を探したと云ひます』

『探してもないのなら、こいつは鳥が咬へて持つてたのだハ、、』

中村二年兵はどこまでも呑氣な事を云つてゐる。

『二年兵殿、ないとすれば明日は外出止になるでせうか、それが心配です』

『外出止め、さうか、こいつは失敗だつた。

宅の班長は、かういう事は嚴重なんだ、おとなしい人だが、こんな事にはきついからな。

こいつは惡かつた、俺も探してやればよかつた。

まあいゝや明日は俺がお土產を買つて來てやるよ』

中村二年兵は野原の憂鬱な顏を見てあわてゝつけ加へた。

『おい野原何がいゝんだ、何でも云へ、俺が買つて來てやるから』

『二年兵殿やつぱり外出止めですか。

お土産はいりませんが、明日は友人が面會に來る事になつてゐるのです。』

『そいつは氣の毒だ。

だがもう仕方がない、諦めて歸らう』

二人は裏門から夕暮れの營舍へ歸つて來た。

その晩夜中になつても野原は眠れなかつた。

歸營して班長殿に早速報告したとき、

『お前は自分の判斷で、探してもなけりやいゝと考へてゐたんだらう、そんな事で軍隊生活の統制がとれると思ふか』

といきなりピシャッと頬桁が撓む程やられた。

尤も自分が口答へをしたのが悪かつた。

『戰場ならば藥莢なども拾はないでいゝと思ひます。』

これがいけなかつたのだ。

おまけに明日は外出止めの上に練兵場へ行つて、もう一度探せと命ぜられた。

となりの中村二年兵はグッスリねこんでゐる。

晝間もねるし全く呑氣だナ、人の氣も知らないで。

えーと、さつき班長殿が云はれた。

『たとへ、それが自分では不合理と思つても、それにはそれで理由があつて命ずる事だ。擬製彈一つが失くなつたところで、別に大した影響はないには違ひない。

だがそれでいゝとすれば、たとへば繃絆一枚、營内靴一足が失くなつたとしても、止むを得ない理由であるからと云つて飽く迄探す事をしないで、ヨショシと濟ましてゆくとすればどうなる？

團體生活だ。いろ〳〵一見不合理に見える事があるかも知れないが、一つの糸でつながる爲

には、その糸を中心に總てを律してゆかねばならない。

中心とは命令服從の關係だ。自分の判斷もむろんその時と場合には必要だ。獨斷專行も決して忘れてはならないが、何でもかでも自己中心ぢや誤つた獨斷になつて了ふ。

お前も相當學力があるんだから、ゆつくり考へて見よ』

云はれて見れば、自分の探し方も實はいゝ加減なものだつた。

明日の外出の事が頭にあるし、何、擬製彈一發位失くしても大した事はあるまいと、タカを括つてゐたのだつた。

探し方がおろそかだつたのだ。

中村二年兵ではないが、まさか烏が咬へて行く筈もないし……。

これが銃ででもあつたとしたら自分の考へで、故意に失くしたのではないから、なくつてもいゝなどとは考へもしなかつたらう。

擬製彈一發と銃と、そこに區別はない筈だ。

こいつは自分の考へ方が間違つてゐた。

しかも班長殿は云はれた。

『皇軍は一發一敵主義だ。沈着に射撃し

を持つ事が肝心だ。

況んや

二
等兵殿
かつたのだ
いのだ。
併し、まあこれも止むを得まい。ズル
あゝ、あゝ腹ペコだ。

靴みがきもいゝが、この際、あの饅頭を一つぱくんと……
堪らない、堪らない。おやおや上等兵殿の靴の上へ、涎を落しちやつたぞ　やけだ、磨け、
磨け、ウントこさ磨け……。
『おい田中、ひとりごと云つて何やつてるんだ。お前のクソ力でそんなにこすつちや、靴が破
けるぞ』
『おゝ戰友殿、察してくれ、今日は酒保デーだぞ、それに』
『情けない聲を出すな、戰友、情あり、豈、涙なかるべけんや、ほい、それ』
『えつ、これはおい饅頭ぢやないか、戰友、これは夢ぢやないのか、持つべきものは戰友だ
な』
『田中、おい、そんなに躍り出しちや駄目だ、お前は酒保止めなんだぞ、めつかると大變だ、
早く處分しろ』
『さうだつた、えゝと、一刻も早くと、併し酒保外で食べてはいけないと、まゝよ最後の手段
だ、俺は何だか、急にお腹が痛くなつた、靴磨はいゝとして一寸その行つてくる』

『ハハハお腹が痛むのか、よからう、便秘でもしてるんだ早く行つて來いよ』

『いや、有難う有難う、あゝ早くお腹が痛い』

『何だ、早くお腹が痛いとは、周章てるな、心をおちつけて、ゆつくり、せいては事を仕損じる』

とたんにテテテと鳴つたのが、運のつき、水飼ラッパの號音だ。

俺は何と云つていゝのか、もはや云ふべき言葉を知らぬ。

こゝでこのまゝ便所へ行かんか又酒保止めの追罰と來る、さりとてこの饅頭を如何せむ。

とは云へまさか、ラッパを無視する程、俺は餓飢道に落ちてるわけではない、樂しみを後に殘して、靴を仕舞つて、水飼ひに驅け出したのは云ふまでもない。

○

翌朝日曜日である。

朝食後、上等兵以上の馬術がある。俺は、ウチの上等兵殿の愛馬旭號を曳いて、舍前に連れて來た。

教官の中尉殿も特務曹長殿も、もう舍前に出て居られる。

ウチの上等兵殿は何をしてるられるのか、まだ見えない。

呼びに行かうとしたら丁度、長靴を提げて、あわてゝ、階段を驅け下りて來た。

見れば、俺が昨日ピカピカ光らせたあいつだ。とても光つてるわい。上等兵殿も鼻が高いだらうな他の上等兵殿の靴とダンチだぞ。

おや、上等兵殿はどうしたんだ、靴を穿くのに不自由して居られる。おやおや、……

しまつた!! しまつた!! 俺は顏から火が飛び出した。

何と云ふ失敗だ。

上等兵殿が穿くに困る筈だ。昨日の饅頭の袋を入れたまゝだつたのだ。

水飼ひラッパに周章てゝ、目の前の長靴におし込んだまゝ仕舞つて、不覺にも忙しさの爲に忘れてゐたのだ。

あゝ、上等兵殿は靴を逆さまにして振つてゐる。俺は目をつぶつた。

『おい、長田上等兵、それは何んか、をかしなものがころけ出したぢやないか』

『ハイ、自分は知らないでありますがこれは饅頭であります』

目をあいた俺に、上等兵が、泣き出しさうな顔で、袋をつまみ上げてゐるのがイヤ應なしに見えるのだ。

俺は又酒保止めをカクゴしなければならなかつた。

毆られた召集兵

『第一的、彈著疑問』

『第二的、廻せ』

射撃からの記號板が小さな映像になつて鏡面に寫る。

植山一等兵は、浮び出るその映像を見逃すまいと懸命に見つめてゐるがさつきから何度も何度も射場からの注意が來るので少からずむしやくしやしてゐる。

尤も植山がむしやくしやするのには原因があつた。

昨日の日曜日、酒保で戰友達としるこを食つてゐるとき、となりの卓子で、トクリを竝べていゝ氣持になつてゐる召集兵が三人ゐた。

どこの中隊か判らないが、もうすでに、定量の一人二本をこえてゐるらしく、大分メートル

み上げてゐる。

植山がもう、引き上げ様と、席を立つたときだ。

『おい、君すまんが、ちよつとたのまれてくれ』

『何でありますか』植山はおとなしく聞いた。

『、、、、トックリ一本買つて來てくれ』

と一人の召集兵がぞんざいに銀貨を一枚投げ出した。

『ハッ』

といつて其金を受取らうとしたが、はずみをくつて其金は床の上を轉づて行つた。

植山はそこ、ここを見廻して見たが一寸見當らない、靴の下か椅子のかけか、キョロ〳〵搜し廻つてゐると

『オイ、ウルサイ奴だなあ、何してゐんだ早く行つて來いよ』

と他の一人がいつた。

『は、今お金がどつかに落ちて見當らないのであります』

『何！　見當らない早くせい早く、なけりや自分で先に買つて來てあとで搜せ』

一番酔つてゐるらしい一人が、威丈高に云つた。

『自分は持つて居らんのであります』

と植山はこんな酔ぱらい共を相手にしては居れないと思つていきなり歸らうとすると

『おい、その一等兵、ちよつと待て貴樣其儘歸るつもりか』

酔つた一人が後で呶鳴つた。

植山は聞えぬふりして、出口の方へ進んだ途端運惡く、これもかなり酔つた召集兵の集つてゐる卓子の隅にぶつつかつた。

『馬鹿野郎氣をつけろい』

と、其處の召集兵の一人が、足をあげて輕く植山の脛を蹴つた。

『どうもすみません』

『すむも、すまぬも、これをもと通りトックリの中に返せ』

見れば、卓子の上のトックリが倒れて酒が一面にこぼれてゐる。

『ハッ悪くありました』

『ばか、悪くあつたですむか、買つて來い、一本買つて來たら許してやる早く行つて來い』

何と間の悪い日なんだらうと思つて植山は途方に暮れ乍ら

『は、それでも自分は今金を……』

と言ひかけたが金がないと云つても、承知はすまいし、かと云つて買つてくるのは業腹だし何もわざと、やつたわけではないが意地悪い連中にかゝちやたまらない。

最前の召集兵と云ひ、この召集兵と云ひ、平生は、い、小父さんなんだらうが、酒のせるとはいへ餘りひどい……

植山は幾分反抗的な氣分になつて默つて立つてゐる。

『何だ其つら、辨償するのがいやなら此の金で一本買つて來い』

と、又一人が五十錢玉をほゝと投げ出した。植山はむつとした。

よし、金なんかいるものか、酒の一本位何とかして買つて來てやる。馬鹿にしやがつて。

と行かうとするとき突然入口の方で

『敬禮』といふ聲だ。

見れば、週番副官がニコニコして入口から中を覗いてゐる。

植山はハッと敬禮して、それから此時とばかり早速そのまゝあとをも見ずさつさと、中隊の方へ逃げて歸つて來た。

○

ところが今日の射撃日には又監的手に當つたので午前四時から起き出して射場のい、處をとらうと思つてゐたのに一寸のところで他中隊へ先にとられてしまつて曹長からいや味を言はれた。

あれやこれやで昨日からの植山には一種の御難つゞきでムシャクシャするのも無理はない。

自然、監的長の代りに監的鏡を見つめてゐる目がチカ〳〵して心が落ちつかない。

あ、又、彈着示せの記號板だ。

監的鏡手の努力が足りないとの射線からの叱言だ。

バン／／／／、實彈がしきりに響く、跳彈が土を飛ばしてゐる。

もう大半終つて、監的壕内は、稍薄暗い。

そのときスーと目の前を通つた作業服の兵が一人、標旗か何かの竿のさきを、鏡に觸れた。

監的鏡はその爲めにガタリと音を立てゝ、位置をかへた。

植山は、焦々してゐる矢先の事なので、いきなり。

『こら、何だ貴樣は、何の爲めに斷りもなく通るんだつ、こゝへ來い』

叱られた兵は、いかにも申譯なさ相に近づいて來た。

その矢先、植山の手が作業服の兵の頰へピシャリと飛んだ。

撲られた兵は、一瞬、耐へ難い怒の色を浮べたが、忽ち冷靜な顏色に返つて、聲もおだやかに

『君は、何中隊だ？』

『何、俺か、俺は二中隊だ』

『さうか、俺も二中隊だ、今、召集になつてゐる豫備兵だが……』

植山は、俄かに狼狽の色を面上に見せた。

しまつた、他中隊の初年兵ではなかつたのか、豫備兵だつたか、これは、やられるな、既に撲られる覺悟で、頰をこは張らせてゐる植山は二の句が續かなかつた。

が意外、作業服の兵は

『殴られたのが俺でよかつた。初年兵が、こんな事でやられたら軍隊生活をどんなに味氣なく思ふかしれないぞ。

お互ひに癪にさはる時もあらうが、それを初年兵に移すのは、可哀想だ。

かうした事では、中隊家庭の實は擧るものではない。

弟たる初年兵が、そんな事では兄貴たる二年兵を慕へやうか。氣をつけることだね』

と物靜かに、說いて、そのまゝ行つて了つた。

植山一等兵は自然に頭が垂れて、思はず目頭があつくなつて來た。

○

汚い作業服の召集兵、それは現役時代から模範とせられてゐたM上等兵であつた。

浴場騒動

『朝湯はどこにゐてもいゝ氣持だな』

『全くのんびりするよ、君は今日外出するのか』

『久振りに、宅へ歸らうと思つたが、お正月に外泊を貰ひたいから今日は我慢してゆつくり、洗濯でもやらうと思つてるんだ』

『さうだな、俺は今日は活動でも見ようと思つてるんだが、ひるから一緒に行かないか』

日曜の朝、ゆつたり浴槽につかつて、みんなそれぞれ、のんびりした話をしてゐる。

第一大隊の入浴場である。

ゆつたりと云つてもそれでも流し場から、脱衣場かけて廣い浴場の事で五、六十人もの裸羅漢さんがゐる。

隆々たる筋肉に盛り上る若者の肢體は實に見事である。

突如、入口の方で『敬禮！』

巡察の週番副官がニユッと入つて來た。

『この中に二中隊の兵はゐるか』

みんな不動の姿勢で

『ハイッをります』

『第三中隊は』

『ハイッをります』

副官 殿忽ち聲を上げて

『出ろ、一中隊以外の兵はみなこゝへ出ろ』

ハッとして羅漢さん達、始めてこれは叱られるのだと氣がついたが後の祭り、ぞろぞろ、湯

から上つて、流し場に竝ぶ。

『二列横隊に竝べ、番號ッ』

『一、二、三、四、五……十』

『十の缺か、合計十九人だな』

『お前達は、あの入口の大きな掛札が見えんか、何度云つても時間を守らん、今日は嚴重に處罰するから』

どうなる事かと羅漢さん目をパチクリしてゐる。

湯の中の一中隊の連中は、したり顔で、ジヤブジヤブやつてゐる。副官殿はさらに云ふ。

『これから各中隊の内務班長の許へあやまりに行くんだ。裸のまゝ、出た、出た』

これには、羅漢さん達驚いた。

『副官殿許して貰ひたくありますこれから注意いたします』

と口を揃へ、頭をそろへて、おじぎをする。

八字ヒゲをしごき乍ら副官殿

『解ればそれでよい、よし、今日は許す、今度守らんけりや、裸のまゝ營倉へ入れるぞ、風邪ひくから早く湯に入れ、ハハハ』

裸の營倉ではとても堪らん、

ハツクション、ハツクションと羅漢さん達再びどぼんどぼんと湯槽の中へ。

○

ところが、丁度その頃、女學生が兵營參觀に來てゐた。

鳩舍——醫務室——縫靴工場——被服庫とつゞいて浴場へ。

『こゝが浴場です、今日は、日曜ですから、朝から兵が入つてをるのです』

何と思つてか案内の週番士官殿ヅカヅカと浴場へ入つた。

羅漢さん達、又かと。

『敬禮』

一齊に不動の姿勢。

竝びも竝んだ羅漢さんの眞裸。

そのまゝ士官殿はすーと外へ。

入口から、ひよいと覗いた女學生さん達、ものも云はずに、この風景に驅け出して了ふ。

中の羅漢さん達、何が何やらさつぱり解らず、依然として不動の姿勢。

氣がついて見れば女學生さん達が、のぞき込んでは驅け出して一順終るまで神妙に立つてゐたと云ふわけ。

まさかとは思ふが、とにかく、ありさうな珍風景として御紹介。

聯隊長の方針

塚田一等兵は何か喜びに眼を輝かせ乍ら、中隊長室の前に立つた。

『コンコン』

『ヨシ、這入れ』

元氣な中隊長の聲が聞える。

『第一班の塚田、本日、表彰券を頂きましたア』

『オヽ、さうか、それは又どうして貰つたのか』

『ハイ、塚田が、先つき炊事場に使ひに行つて、歸りに第九中隊の裏を廻りますと、洗濯物が風に飛ばされて落ちて居りましたら、それを一々拾つて物干場にかけて居たのを見られた坂本中尉殿から戴いたのであります』

『あ、さうか、それは誠によろしい、これからよく其心懸けでどこまでも、善行を積むようにせよ』

塚田は、善いことをしたといふ喜びの他に、中隊長から賞めて貰つて二重の満足を味ひ乍ら班へ歸つて行つた。

○

H聯隊長の方針で、隊内の善行を助長する爲に、表彰券を交付する――之は聯隊で作つたものを各將校に分配して置いて、自分の部下ではなく、他の中隊の兵の善行を發見する毎に贈呈之を交付する――様に定められてからといふものは、知らず〳〵の中に聯隊内に、善行ッ風氣風が生れて來て、各中隊共殆んど毎日の様に、幾つかづゝの表彰券が兵の手に渡されて行くやうになつた。

聯隊長は其狀況を知つて幾分満足の色を表はしてゐたが、然し、どうもまだ、聯隊内の歡迎の動作が餘りよくない。

どうにかして其勵行を確實にさせねばならんと常に腐心してゐた。

或日聯隊長は兵營から歸宅の途中、其事を考へ乍ら馬の歩を進めてゐるとふと前方の露路から現はれて來た將校の傳令らしい兵がチラと此方を見て、自分の來ることを知り乍ら其まゝ足を速めてズン〳〵行くのを見受けた。

『これはいかん、何とかして注意をしてやらう』

と思つた聯隊長は遽かに速歩で其後を追跡した。

馬の足音の近づくに從つて其兵はだん〳〵足を速めて行つた。

然し馬の足には到底かなはない。

『オイ、其兵！』

聯隊長から呼びとめられた塚田はその瞬間ドキッとして振り向いて敬禮をした。

『お前は先つき、聯隊長の顔を見ておき乍ら、なぜ敬禮をせなんだか？』

『ハイ……』

『さういふ不心得な兵は處分をするぞ。何中隊の兵か？』

『ハイ……』

『何中隊か、それから名前をいへ』

塚田は早や泣きさうな顔をしてゐる。

『あの時にちやんと敬禮をして置けばよかつたのに』

と思つても今更おつつかない。

戰友から頼まれて傳令の序に横町の菓子屋で餅菓子と飴玉とを買つて、露路から本道へ出たばかりの所を急に聯隊長にぶつかつたのだから、何だか間が悪くて、つひ敬禮をしはぐつてしまつたのだ。

往來の眞中でこんな事件が始つたので、道行く人が立ち留つて來た。

或者は叱られてゐる兵に同情して、聯隊長の顔を小憎らしさうに見上げてゐる者もある。

聯隊長はだん〳〵人がたかつて來るので少々具合が悪くなつてとに角名前だけを聞いて許してやることにした。

『ヨシこれから先、よく注意をせにやいかん。行つてよろしい。』

○

聯隊長は一晩考へた。

そして翌日、聯隊全員を一堂に集めて、敬禮の意義や、其必要に就て懇々と說明した。

そして上官にも、答禮は確實にすべきこと、又上下左右を問はず敬禮は進んですべきものである。それが上下の親愛の情を形の上から增進し、やがては美はしい精神的團結を益强固にする所以であることを說いた。

其後聯隊には美はしい情景が表はれて來るやうになつた。

それは夜間の敬禮に就てである。

夜間は階級は勿論彼我の識別すらよくつかず、敬禮はとかくおろそかになり勝ちのものであ

る。

所がこの聯隊の兵はいづれも、皆、夜間、人に遭ふと、きつと其官氏名をいつて、誰彼の差別なく敬禮をすることになつた。

『木村一等兵』

突然暗やみから自分の名を呼ばはり乍ら敬禮すると、相手も

『鈴木上等兵――あゝ、木村か、傳令の歸りだね、御苦勞さん』

こんな具合だ。

又將校でも

『橋本中尉』

『や、大島大隊長です、よく判りましたね。』

『ハッ、大隊長殿、今お歸りですか、大分御勉强ですね』

『あゝ、明日からの大隊現地戰術の準備でね――』

『さうでありますか、私の所の大隊も先月やつて來ました』

『ああ、さうだつたね、○○はいい所だらう』

といつた樣な譯で自然の中に將校團内の親みも增えて行く。

或時は

『岡本軍曹』

といつて停止敬禮をすると、

『田中上等兵、アッ班長殿でありますか』

『ヤ、田中上等兵か、お前は身體が大きくて、歩き方が落ちついてるもんだから、中隊長殿かと思つたよ、アッハハッハ』

『ハッハハハ、それはすみません』

などいふこともある。

然しこれが上官と部下の間、戰友相互の間の親密の度を增す上に於てどれだけ役に立つてゐるか判らない。

○

それからもう一つ聯隊長の方針として此の聯隊に珍らしいことは聯隊の全員千數百名のものが一人殘らず皆「つはもの」新聞を購讀してゐることだ。

月僅か十六錢の金でこれだけ立派な新聞が讀めるといふことは願つてもないといふところで、聯隊長の命令で全員が購讀してゐるのである。

戰友の味

ふと隣りのベッドを見ると、窮屈さうに寢臺の狀袋の毛布の中で氣をつけしてゐる戰友が馬のやうな目をあけて、矢張り寢られないと見えて天井をにらんでゐる。

『オイ、どうしたい、馬』

何思はず馬と云つたが、顏の長い目の大きな戰友は、別に不思議とも思はないらしくこちらへ向いて

『ウンねられん、狀袋が窮屈でたまらん』

『全くだ、俺は第一シャツを着てねるのが不得手なんだ』

『おれは又、シンダイでねた事がないから駄目なんだ』

『まだこれから三百六十四日あるわけだ、思ひやられるぞ』

『君とは戰友と云ふやつだが、とにかくたのむぞ』

『たのまれても、どうしていゝかわからんが、おれもたのむぞ』

『時に小便に行かないか』

『一緒に行かうか』

馬と二人でやつこらさと起きて帽子をかぶつて二階から便所の方へ下りて行つた。出口で不

寢番に捕つた。

二人揃つてどこへ行くんだ。

『小便に行くのであります』

『二人でゆかんでも一人でゆけるだらう、これから一人づつ行け』

『ハイ』

むろん冗談であつたのだが、こちらは眞面目だつた。小便を終つて歸つてから馬が云つた。

『軍隊は小便に二人でゆくのがいかんらしいな、困つた事になつた』

『困つたとはどうしてだ』

『いや恥しいが、俺はあの便所のところの柳が何だか怖いんだよ』

馬は大な圖體でゐながら臆病者の本音を吐いた。

それからは馬が小便に行くときは、いつも起こされて三四間間隔をおいてついて行つてやつたのであるが、暫くすると馬も一人で小便に行ける樣になつたのは無論である。

戰友と云ふものは全く一種特別の味があるものだ。

慰問袋の來た日

『慰問袋を渡すから各小隊五名づつ來い。』

經理室から命令が來る。

『オイ初年兵行つて來い』

といつもなら來るところが

『ヨシ來た』

と、この時ばかりは二、三年兵の腰が輕い。

何と云つても祖國を離れて敵彈の中に緊張した生活をしてゐると、故國の匂ひを持つてくる慰問品や手紙が實にうれしい。

手紙は併し、受取人個人のうれしさが大半であるが、慰問品はそれと違つて全體的の愉快が

各人に行き渉るので、かう云ふ命令が來た時のはしやぎ樣は早慶戰以上の騷ぎである。

エッサ〳〵と抱え込んで來る手拭地の袋が見えると

『來たぞ來たぞ』

『今日のは何處からだ』

『素晴らしく大きいぞ』

蜂の巣をつゝいた騷ぎだ。

『美味いものが入つてゐるといゝんだが』

と食意地が最先の者がゐるかと思へば

『キレイなお孃さんのが來る樣に』

とワク〳〵しながら祈つてる者もゐる。

その中に右翼分隊長が各分隊の分を一山づつ盛り上げる。

『各人二個宛とれ』

『ウワーッ』

拍手や口笛の伴奏で、各分隊は自分の山を占領する。

さあそれからが大變だ。

誰れもかれも一等運のいゝのを欲しがるのは同じなのだから公平に抽籤をする事になる。

一人が慰問袋に番號をつけ、一人は番號をつけた籤引線を作る。

一人一人がワクワクし乍ら

『俺は十二番だ』

『イの一番は縁起がいゝぞ』

と當つた番號のを引つたくる樣に貰つて戀人の寫眞でも抱へる樣に胸に抱きしめる。

慰問袋はかうして抱きかゝへてゐるときの樂しみが全く何とも云へない味なのだ。

『ワッハッハッハ』

爆笑の渦の中に

『これりやどうぢや』

と奇聲を放つもの——

『助けてくれえ』
と悲鳴を上げるもの――
目の前に出されるものは、石鹸、靴下、歯磨、封筒、タオル、雑誌、キャラメル等々一通り誰にも行き渡つてゐる。
『オツこれは及川のブロマイドだ、俺を見て笑つてるぞ、ハハすてきだ』
『俺のは夏川だ、海水着と來たからたまらないよ』
『オイ、キャラメルをやるから俺に一枚くれよ』
と、女の姿には若い連中の事だ大騒ぎをやつてゐる。
『オイ〳〵みんな拜んでくれ北は悖太神社から鹿島香取、朝鮮神宮、臺灣神社、數へ切れないお守り札だ。それに丁寧に神社のいはれまでついてゐる。武運を祈ると書いてある。
これには頭が下る』
とお守り札を押し戴く者がゐるかと思へば
『この手紙を讀んでくれ、俺は涙が出て來た、一失業者よりと俺よりか拙い字だ。

ハンカチをくれたんだ。うす汚いハンカチだと思つたら、買ふ金がないからキレイに洗濯しておくるから眞心だけくんでくれと云ふんだ。
俺はこれこそお守りにする。オイみんな……』
と涙聲になつてゐる者がゐる。
『これは何だ、五錢玉に紐がついてる、ハテナ紐の端に名刺がくつついてゐるぞ、何だか書てある。
何、死線を超えて（四錢を超えて）――ハハナルホド死線を超えてか、うまい事を考へたナ』
と、しきりに感心してゐる者。

慰問袋への興奮と歡喜とはいつ果てるとも見えない。

何しろ、ドッサリ貰つた慰問品をどんな難行軍にも離さず、背負つたりブラ下げたりしてつはもの達は銃後の國民の赤誠を身につけて第一線に奮鬪をつゞけるのだもの。

手紙の來た日と慰問袋の來た日と、こいつは一生忘れられない。

目さまし時計

『なかなか元氣ぢやの、わしにはそないに失敬せんでもえゝわ、村にゐたときはお前は村長さんにもおじぎせなんだが、今見とると誰にでも失敬しよるが、流石に軍隊は禮儀正しいなう。

まあ何より丈夫で結構ぢやて、おゝ之はばあさんがお前にと云ふて、それ好物ののり巻ぢや。

わしも一つよばれるから一つやらんか、まだ、カキ餅も持つて來てある……』

『もういゝです、食べるものは酒保にありますから心配しないで下さい。

この前の手紙に腹が減ると書いたのはつまりその御飯がおいしいと云ふ意味です。

酒保へ行と金が懸るので御飯以外は食ないで辛棒してるから自然腹が空くといふ譯で……』

『若いものが腹を空かして我慢しては身體に惡い。少し位金が要つても酒保とやらには行つた方がえゝぞこれは小遣ぢや』

『あつお父さんこれはどうも有難う。

もう時間ですからこれでお別れします』

『時間？　おゝ時間と云へば、わしはお前にやるものがある。

この間の手紙で、朝ねむくて辛いとあつたので、萬一宅でゐるときの樣に糞過ぎまでもねては隊長樣に申譯ないので、眼さまし時計を持つて來た』

見れば、十年も前に買た古ほけた大きな目さまし時計がボッコンボッコン音を立てゝゐる。

『お父さん、軍隊の目さましはもつと立派なのがありますからそいつはどうも……。

それ今鳴つてるのが夕食ラッパあれが朝は目さましラッパになるのです』

『へえ、それぢやあのラッパ吹く人にこの目さまし上げておくれ』

要領と誠意

『陸軍歩兵二等兵北原秋夫、同山川幸太郎、同白井直三、同山本和平、右十二月二十六日付を以て陸軍歩兵一等兵を命ず』

曹長から命令が達せられた。

點呼が終つた。班内は、この命令で俄かにあちこちに私語が交はされた。

『山本のやつ、うまくやりやがつたぞ』

『要領一等兵だ、あいつは』

『俺達は上等兵候補者で一生懸命やつてるながら落第して、漸く四五日前に一等兵だ。山本の奴が今日一等兵になるなら俺達はとつくに上等兵なんだ。チェッ要領で一等兵になれるんなら修業なんか糞喰へだ』

上等兵に落第した泉一等兵は、中でも最も盛んに憤慨してゐる。

さすがに點呼後なのでひそひそ話ではあるが、中隊中にそれは電波の樣に擴がつて行つた。

當の山本和平は、今日も齒が痛くて、頬を腫らしてもう寢臺に入つてゐる。

むろん眠つてはゐないのだから耳に入つてくるこの私語が一々ビンビン胸に應へてくるし、戰友達の態度が何か自分に變なのも目についてくる。

山本はみんなに、そんな目で見られるのが非常に心苦しかつた。

要領の一語で片づけられる自分の態度は決してそんなものではない。自分は誠意を持つてやつてゐるのであるが……

なるほど自分は、他の人に比べて頭痛がしたり、齒痛をおこしたりして、止むを得ず練兵休をして來た。

そして、演習に出た後の班内の整頓や、時には舍前の掃除をしたりして、せめては練兵休の自分が出來るだけの事をして戰友達の勞を省く心掛けをしてゐる。

そんな事が却つて他の人の氣持を惡くするのかも知れんが、自分は決してこれを要領とは思

つてゐない。誠意をつくしてゐるつもりである。

いつかも練兵休で班にゐたとき唾壺が汚なかつたので、それを下げて洗ひに出かけるところを丁度中隊長が見られて、

『お前は頭痛で練兵休をしてゐるゐんぢやなかつたのか、身體を大切にしなければいかんぞ、唾壺を洗ひに行くのか、い、心掛けだ』

と云はれて、自分は

『ハッ、充分氣をつけます』

と云つたがその後で、それを見てゐた週番上等兵が、

『お前は頭が痛いと云つて練兵休をしてゐながら唾壺洗ひに出かけなくてもよからう。そんな事が出來るのなら、演習に出たらどうだ』

と多少皮肉を云はれた事があつたりした。

こんな事が『山本は要領がい、要領がい、』と云はれるもとであると思ふが……

山本は寢臺の中で、痛む齒の事を忘れて、いろいろ考へてゐたところへ突然寢臺の前で

『山本一等兵殿。横山は不寢番に立ちますが三十分毎に齒を冷やす申送りをします。終り』

と云つたのは日頃から山本に好意を有たない横山一等兵である。

横山は云ひ終ると、自分でクスクス笑ひ乍ら出て行つた。

山本は何と云つていゝのか言葉が出なかつた。

明らかに横山がからかつてゐるのは解つてゐるが、態々齒を冷やしてくれると云ふのを斷るわけにもゆかないし、それかと云つて自分は冷やして貰ふ程の事もない。

又殊更に山本一等兵殿などと云つてからかふ樣な連中に冷やしてくれる誠意のある筈がない。

兎に角不愉快なことだと山本はひとり心を痛めてゐた。

すると、とんとんと階段を上る足音がして横山が不寢番の腕章をつけてやつてくる。

何か又皮肉を云つてゆくんぢやないかと山本は寢た振りをして額まで毛布をかぶつた。

『おい、山本、山本、もうねたのか、タオルを持つて來たぞ、冷やした方がいゝぞ』

さつきとは丸で變つた眞面目なもの、言ひ方だ。

『横山か、有難う。だがもういゝんだ、有難う、これだけでもう後はいゝんだから、さう云つてくれ』

『山本、さつき俺は、君をからかつてすまなかつたよ、かんべんしてくれよ』

『いゝよ、そんな事』

『山本、俺は、思ひ違ひしてたんだ、君が要領要領と云はれてるのはみんなの間違ひだ、俺は、今夜、君のほんとの心持が解つた』

『横山、有難う、だが一體……？』

『うん、それにはわけがある、俺は今不寢番で廊下に立つてるたんだ、洗濯物がかけてあるから數を勘定してるると、俺のシャツがあるんだ。俺は今日洗つたおぼえがなかつたから不思議に思つたんだ』

『あゝ、さうか、それは云はうと思つてるうちに、進級命令や何かで、變になつたのでつひ云ふ機會がなかつたんだ、默つてやつて惡かつた』

『いや、俺は君のほんとの心持がよく解つたよ、許してくれ』

『許すも許さないもないよ、俺は今日も練兵休で、みんなにすまんからと思つて、班の掃除をして後で自分のシャツの洗濯をしようとして、ひよいと見ると君の寢臺の下にシャツの袖が見えたから、出して見ると、洗濯しようと思つて君が置いてあるやつらしかつたから、つひでにしたんだ。

よけいなおせつかいだつたが……』

『俺も不思議だと思つて、俺のシャツの隣を見ると君のシャツがかけてあるからハッと思ひあたつたんだ。

やつぱり君だつたんだな、俺は恥しい。最初は、山本のやつ、日頃、俺が惡口を云ふもんだから、おせじに洗つてくれたんだとしか考へなかつた。

併しよく考へて見ると君は齒が痛くて練兵休だし、しかも明日から君は一等兵だ。

俺は今度はほんとに自分の考へ方が恥しくなつて、冷やす事なんか忘れてゐたんだが急に思ひついてやつて來たんだ。

全くすまなかつた。山本。

どうだ、齒は痛むか遠慮なく云つてくれよ』

『横山、俺は進級した事よりも君のその言葉が何よりうれしい。

俺も誤解される樣な態度がいけないが、これから君らとほんとの戰友として心から一緒にやつてゆかう。

もうすぐ初年兵が入つてくるんだ、お互ひにしつかりやらう』

横山と山本とは不知不知しつかと手を握り合はしてゐた。

正確な報告

『さつきから云つた樣に斥候の動作は機敏、大膽、細心といろいろあるが、結果に於て正確な報告を持つて來なくちやいかん。

大體の要領はこれまでにして斥候動作の實地演習をやる』

臼田初年兵はさつきからナル程ナル程と頷いてゐた。

正確な報告、さうだ正確でなくちやいけない、俺はこんなに肥つちよで機敏や細心の點では負けるかもしれないが、大膽と正確なら誰にも負けないぞ……臼田は期するところがあつたので、自分の番がくるのを待つてゐた。

『それから、鳥が飛んでゐたら敵の飛行機と思つてそれに對する動作もやれ』

出發に際して教官から注意があつた。

臼田は自信に溢れた顔付で駈け出した。

暫くたつた。

意氣揚々と臼田は報告に歸つて來た。

『臼田斥候報告、敵は第五班の山本上等兵であります。

それから一本松に敵の飛行機二羽止つて居ります。終り』

正確に報告した臼田初年兵は教官からほめられるのを待つてゐた。

『臼田、ワツハツハそいつは正確すぎる、もとへッ』

『ハッ、まだ忘れてをりました敵のタンクが一臺ありました』

『タンク?』

『ハッ、鳥が飛行機だから牛はタンクだと考へました』

『ワツハハツハ』

一同の爆笑の中に臼田は不動の姿勢をつゞけてゐる。

一つの決心

五月空に日本男子の意氣を見せて、赤い鯉や黑い鯉や、金色に光る矢車やが、街の空にいくつもいくつも見えてゐた。

炊事專務兵の田中はそれらを見乍ら、ほんやり田舍の家でたてた自分の幟りの大きかつた事などを思ひ出してゐた。

その時ふいに何に驚いたのかパッと飛び立つた鳩が、田中の頭の上へ舞ひ立つたかと思ふと又下りて來た。

下りた所は、米洗ひ場である。その邊に白い米粒がこぼれてゐる。
田中は鳩がクックッ啼き乍らうれしさうに食べてゐる有様を見るとはなしに見てゐた。
ふとそのとき田中の腦裡に閃いた事がある。
小學校へ行つてるとき、辨當の飯を食ひ殘して歸つて、それを放つたらかしておくと晩にはきつとその殘りがお膳についてゐる。
こんな冷飯は食べられないと駄々をこねるとお祖母さんは
『健三や、勿體ない事云ふてはいかんぞえ、
お米の有難さを知らんと目がつぶれるぞや、勿體ない、ちつとも惡くもなつてゐないのぢやから食べなされ、お祖母さんが食べてもいゝのぢやが、お前はいつもそんなではお天道様に罰があたるから、さあそれを食べたら、ぬくぬくしたのをあけるぞや。
お前かう云ふ話があるぞえ。
昔あの黄門様、それ水戸の光圀公が下々の事情をお調べになるのでお百姓姿で方々を廻はられたとき、或村で喉がかわいたので水を貰ひにお百姓家に行つたのぢや、そのとき庭に米俵が

あつたので、疲れてゐなさつた黄門様はその米俵に腰かけて、貰ふ水を待つてゐたのぢや。
そのうちに土瓶に水を持つてそこのおかみさんが家の中から出て來て、この有様を見たのぢや、
（水をくれと云はしやつた旅人はこなたさんか、わたしやもう水を上げられませんわい、とつとここを出て行きなされ）
とエライ權幕で黄門様を叱りつけたものぢや。黄門様は驚いて、
（これこれ、そないな無慈悲を云はんで、それそこに持つて來て下さつた土瓶の水を飲ませて下されよ、何かお氣に障つた事でもござるのか）
（氣に障るも障らんも、お前さんは自分のしてゐる事がわからんのかいな、今お前さんの腰かけてゐるのは勿體ない米俵ぢやないかい、それも水戸様へ納める米俵なんぞえや。
汗水たらして粒々辛苦したお米に腰をかけて何とも思はない様なお前さんには、一滴の水だつたとて上るわけには參らんわな、
お前さんは他所者で知らんだらうが、こゝの村ではそんな罰當りは一人も居らんのぢや、と

つゝと出て行きなされ）

黄門様はおかみさんの云ふ事を聞いて居られたがハタと膝打つて

（こりやわしが悪かつた、許して下されよ、おかみさん、さあ格さん助さん行きませう）

と黄門様はニコニコし乍ら、もう水の事など忘れてその百姓家を出てゆかれたのぢや、

後で、そのおかみさんには御褒美が下つたのぢや。

健三や、お米は、お百姓さんが汗水流して作つた尊いものぢやよ

粗末にしてはそれこそ目がつぶれるのぢやよ』

長い黄門様の話をしてくれても田中はどうしてもその冷飯を食べなかつた。

お祖母さんは仕方なしに勿體ない〳〵と云つて自分でそれを食べて、田中には温い御飯をつけてくれた。

そのお祖母さんもずつと前に亡くなつた。

（大きな鯉幟をたててくれたのもあのお祖母さんだつたのだ）

と田中は、鳩が又何かに驚いて飛びたつ羽音に回想を破られた。

もう洗し場には米粒は見なかつた。

田中はお祖母さんの話が何だか今になつて解る様な氣がした。

初年兵が入隊した頃、殘飯が澤山出來て、全く勿體ないと思つた。

それはみんな豚にでもやるのか商人が買ひ取つてゆくが、それにしても何とか方法はないものかと考へた事がある。

今、鳩が來て、こぼれた米粒を拾つてゐるのを見て、しみじみお米を粗末にしてはならない今少し注意さへすればこぼれるのもふせげるに違ひないと思つた。

翌日、田中は昨日の決心を實行する爲に、洗ひ場の米を拾つてゐると、炊事軍曹が來た。

『田中何をしとるか』

『ハイ米を拾つて居ります』

『それは又感心だ、いつからやつてゐるのか』

『ハッ……昨日決心したのであります』

と手短かにお祖母さんの話をした。

『その心掛は立派だ、つゞけてやれよ、第一拾ふのもいゝがこぼれぬ樣に注意せんといかん。わしからもみんなに注意しとくから』

軍曹は田中の敬禮に微笑を返して向ふへ行つた。

『おい田中、まごまご何してゐる、ちよと來い』

同じ專務兵の加藤が呼んでゐる。

『今すぐ行く、まつてくれ』

田中はキレイに洗つた米を、それでも片手に一杯位あるのを持つて行つて、これからしかけ

る釜の中へ入れておいた。

そして加藤の傍へ行つて

『何か用か』

『いや今、國から手紙が來てよ、この次の日曜日に歸つて來いと云つて來たんだ』

『何か用事が出來たのか』

『もう田植だから歸つて手傳へつて云ふんだが、どうも俺いやなんだ、何とか工夫はないか』

『田植、それや歸つたらいゝ、俺も行つて手傳つてやる。

俺んとこは今商賣してゐるから田植はないが昔はやつてたんだ、俺も行つてやるから歸れよ』

加藤は眞劍な田中の顏を不思議さうに見てゐたが、

『田中、ほんとか君』

『ウソぢやないよ、さう返事しておけよ』

田中は益々眞劍な顏で云つた。

加藤はけげん相にその顏を見つめてゐた。

流し場の附近ではクウクウといつもの様に來た鳩が米を探してゐた。

ほまれのけむり

芽が出たアカシヤの木の下に叉銃休憩をして、みな一齊にほまれのけむりをブカブカやつてゐる。春晝、練兵場の長閑な風景。

『おい一つやつてみろ金子』

分隊長が金子上等兵に云つた。

『ハツ、やりませう、ほまれと云ふ題でやります』

『ヨシ、金子の後でみんなも一つづつやれ、俺もやるからナ』

金子上等兵暫く考へてゐたが

『分隊長殿出來ました

つはものはほまれを高く空にふき——はどうです』

『ウン、おもしろい、次は』

『原田、出來ました。

分隊で吸へばほまれの煙幕だ』

『煙幕だは何だ。何とかしろ、だがまづいぞ、さあ次』

『高屋が一つ

ほまれ吸へばあんぱん一つ欲しくなり

はどうです』

『意地汚いぞ、まあ四點だナ』

『分隊長殿、大原、こいつは白旗ですよ、少くとも八點はあります。

七厘のほまれを分けて功六級

意味深長ですよこれは』

『深長すぎて解らん、説明がゐる』

『つまりですな、戰場で、戰友がほまれを分けあつてですな、たつた七厘のほまれであるが、一服吸つて元氣を出して、手柄をたてたのです。金鵄勳章を貰つたもとでが七厘のほまれだと云ふんです』

『おそろしく手が込んでゐるんだナハハハハ……』

『分隊長殿は出來ましたか』

『ウン俺のか、俺のは一本を吸へば集合丁度鳴りはどうだ』

全く丁度そのとき『集合!!』と小隊長の聲。

擊發裝置

消燈喇叭が鳴り終つた。

美浦二等兵は入營して始めて書く故郷への便りを、中途でペンを置いて、便所に行つた。

（何もついでだ、こいつを空けて來よう）さう思つて抱へて來た吸殼入を持つて、手探りで吸殼棄場に近づくと、靴音がして誰かこつちにやつて來る。

すかして見ると、着劍した銃を擔いでゐるところは巡察中の衛兵司令山岸上等兵らしい。

美浦は吸殼入を下に置くと、暗闇の中に姿勢を正して、擧手の敬禮をした。

『山岸上等兵殿御苦勞さまであります』

『おゝ美浦か？　有難う。何にして居るんだ、早く歸つて寢ろ、今夜は非常呼集があるかも知れんぞ』

山岸上等兵は、さう云ひ捨て、又闇の中に消えて行つた。

美浦は一人ほくそ笑みながら、班に歸つて來ると、上着だけ脱いで、非常喇叭が鳴つたら、すぐ飛び出せるやうに準備して、戰友に氣附かれないやうに、そつと寢臺にもぐり込んだ。

四五日前班長から敎へられた非常呼集に就て、その手順と心得を記憶の中から引つ張り出して、今夜は一つ二年兵を出し抜いて、戰友達をアッと云はしてやらうなどと考へてゐると、不寢番と入れ違ひに、週番上等兵が廻つて來た。

週番上等兵は、美浦達の銃架に近づくと「カチリ」「カチリ」引鐵を調べ始めた。

見て居ると美浦は何だか急に不安になつた。ぢつと息を殺した。

とたん「ガチッ」と强い音がした。

美浦はハッとした。同時に、全身の血がサッと頭に押し上げて來た。

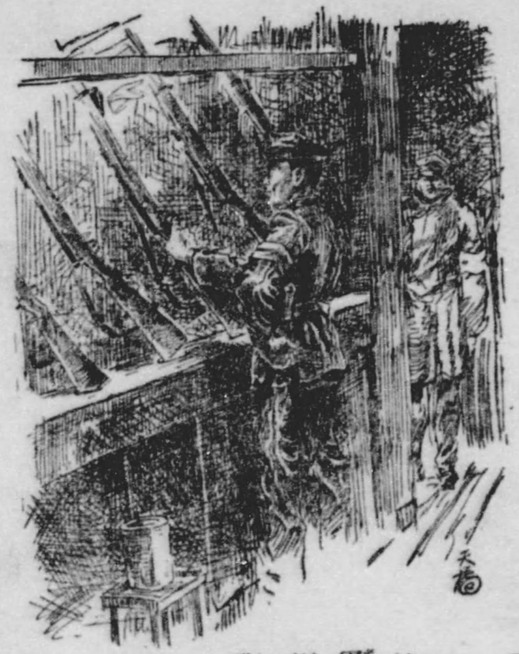
『しまつた』

彼はもう少しで聲を立てるところだつた。

週番上等兵が今握つた左から三番目の銃は彼の銃であつた。

『美浦！　起きろ！』

上等兵が怒鳴つた。



『ハイッ！』

觀念した美浦は、元氣よく返事はして見たもの、悲しいことには軍袴と靴下をはいて居る。直ぐ起きようにも起きられない。

隣りに寢てゐる下田二等兵が

『美浦、早く起きて、あやまつて來い』

と小聲で心配してくれるが、軍袴と、靴下を脱がなければ起きられないのだ、窮屈な寢臺の中で、彼はやきもきした。

やつとの思ひで軍袴と靴下をぬいで上靴を突つ掛けた時には、週番上等兵は、美浦の銃を逆様に銃架にかけて

『美浦、明日の朝第一班へ來い』

と鋭い言葉を殘して出て行つてしまつた。

（明日の朝か、きつと毆られるに違ひない）

恐ろしい鐵拳を想像すると、美浦は自分の可愛さうな横面を一寸なでて見た。

ふら〳〵と頭を枕に落すと間もなく此度は非常呼集の喇叭だ。

『起きろ！　起きろ！』

『非常呼集だ！』

『初年兵、あわてるな！』

口々にわめき立てる二年兵達の聲で、中隊は浴場のやうにごつた返した。

その騒動に美浦二等兵も勿論飛び起きた。

二、三分前には脱ぐのに骨を折つた軍袴と靴下が、此度ははくのに厄介だ。

美浦はうん〳〵唸りながら、靴下を探してゐるのだが、何處にどうなつたか見當らない。

手早く代りの靴下をはいて出ようとするともう班内には誰も居ない。

つひ先つき迄は非常呼集の先陣を夢見て心躍つた小勇士も、今は全くしどろもどろだつた。

『何と云ふざまだ』

美浦は聲をあげて、見すぼらしい今の自分を輕蔑した。

○

次の朝美浦二等兵は、青い面を昨夜の夜間演習に疲れ切つた肩にのつけて、しよんぼり第一内務班の入口に立つた。

『週番上等兵殿は居られますか』

思ひ切つて尋ねて見た。

『居らんぞ！』

中隊でも意地の悪い、大村一等兵が妙な薄笑ひを顔一杯に浮べながらじろ〳〵彼の面を見上げた。

美浦は、大村の視線を逃けながら、ひよいと、窓の方を見ると向ふむきに窓から首を突き出して居るのは、どう見ても週番の泉上等兵だ。

どうしたのだらうと、もじ〳〵してゐると、

『居ないと言つたら歸れ』

大村一等兵が又怒鳴つた。

美浦は、しんめうに不動の姿勢で聞いてゐたが、何だか、二年兵達にからかはれてゐるやうな氣がして、腹が立つて來た。

○

『美浦は居るか？』

その日の各個教練が終つて、銃の手入をして居ると、そこへヒヨツコリ週番の泉上等兵が這入つて來た。

美浦はゴクツとつばを呑んだ。

『一寸こつちへ來い』

（いよ〳〵やられるなア）と思ひながら、美浦は上等兵の後について便所の裏へ行つた。

二人切りになると、上等兵の態度が妙におだやかだ。

『美浦心配したか？』

『はア』

『さうか、だが、殴りはせんから安心しろ』

『はア、何とも申し譯はありません』

『よし〳〵、而し是からは氣を附けるんだぞ、い、か』

『はア良く分りました』

『今朝、お前の戰友の下田が、俺の處にやつて來て、昨夜の美浦のことは、俺の注意が足りなかつた爲めなんだから……俺にめんじて許してやつてくれと、謝つて來たんだ。

歸つたら下田に禮を云つて置け、それに、あんなことでは上等兵候補者にもなれん——と云つたからつて、何も氣を落すには當らん、俺も、一度はあんなことがあつたんだから——』

『はい、よく解りました、之からは決して……』

美浦二等兵は思はず、頭が下つて、眼の奥から熱いものがこみ上げて來た。嬉し涙が兩頬を傳つて、彼の營内靴の上に落ちた。

○

美浦は週番上等兵を見送りながら、日頃さう有難くも思つてゐなかつた無口な戰友下田二年兵のため、どうあつても上等兵候補者にならうと決心した。

昨日書いた故郷への手紙も、あれでは嘘だ、書き直さなければならぬと思つた。

火藥庫歩哨

性來剽輕者の天野二等兵が始めての火藥庫歩哨に立つた。

練兵場の脇の山の下、畫も暗い程茂つてゐる樹立の下に火藥庫が、雨の中に建つてゐる。

『ナルホドこいつは少々參るわい、俺だからいゝ樣なものの氣の弱いやつはつとまるまい。

だが賑かだ。ああして蛙がガアガアジャズをやつてゐるし、梟が時々笛を吹くし、ホロホロ啼くのは山鳩か、カアカア啼くは親なし烏、ケンケン子雉子もないてゐる』

天野はわけのわからない事をひとりごとしながら眞夜中の土堤の上を廻つてゐた。

細い雨が滴になつて庇からポツポツ落ちる。流石の天野も少しは心細くなつたのか默つて歩いてゐるとうしろに何かの足音がする

『誰か』

『巡察』

『ハツ異狀ありません』

『初年兵か』

『ハツ』

『淋しいか』
『何ともありません』
『さうか、今火藥庫に火のついた藥を咬へた鼠が入つたら、歩哨はどうする』
『ハッ』
『どうする今入つたぞ』
『ハッ猫に水を持たせてやります』
『ハハハなかなか頭がいゝぞ、守則は解つてるだらうナ、氣をつけてやれよ』
巡察は雨の中を土堤を下りて行つた。

馬糞長の信念

ドカ〳〵〳〵……
一人で五六足宛の編上靴を提げて、階段を降りて來た初年兵の一團が掃出されるやうに裏の出口から飛び出すと、其處此處へかがんで『ゴシ〳〵』こすり始めた。
『ヤアこれぢや仕樣がないや、筒つぼばかりで絨は一寸ともくつついてやしない』
『みんな駄目だナ、俺は手入布片持つて來て使ふよ。此處へ俺の奴置いて行くから野村一つ監視を賴むぜ』
『ヨシ承知した。その代りお前が使つちやつたら俺にも貸して呉れ』
『エ、貴公中々拔目がないぞハハハ……』
成程竹切の先の絨は取れてしまつてその竹切れには保革油がベタ〳〵附いてゐる。

手を出すにも躊躇するやうな始末。

大勢の初年兵の中に混つて一生懸命に刷毛を掛けてゐる二年兵が一人あつた。

馬取扱兵の崎島一等兵である。彼は考へた。

(こりやひどい、毎日使ふ公共品がこんなことぢやいかん。何とかしなくちや)

翌日保革油鑵は綺麗に手入されてあつた。

竹切にこびり付てゐた油はすつかり拭きとられ、絨布も充分卷附けられて、誰が使ふのにもほんたうに氣持よいやうに行屆いてゐる。

何時ものやうに編上靴の手入にやつて來た初年兵達は誰もが吃驚した。

『オイ高野、保革油鑵が見違える樣に綺麗だぞ。誰がやつたのだらう?』

『崎島殿がやつたんだよ』

二人の話へ傍から宇邊二等兵が口を出して

『さうさう、公徳心といふものは須くかういふ處に發揮するものだ』

『何ダイ宇邊、如何にも覺つたやうなことを云ふなよ』

『オイ覺つたやうなぢやない、ほんとだ。今日から早速崎島殿に見習ふよ』

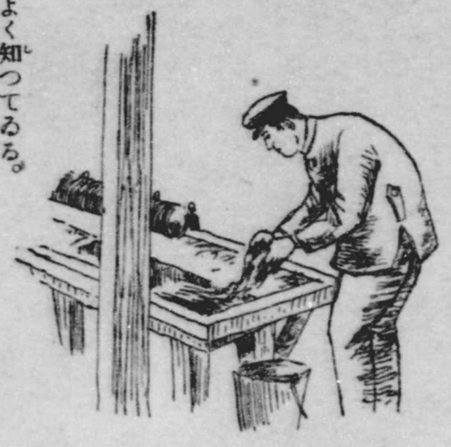
かうして、初年兵の間に敬服されてゐる崎島一等兵は、能力といへば尋常三年きり、頭の働がない然も無口な性格は軍隊へ入つてからもあまり見榮えがしなかつた。

第二期になつて、馬取扱の特業を命ぜられると二年兵や同僚から馬糞長といふ有難くない別名を奉られた。

然し彼はそんなことには一向耳を傾けぬ。

厩へ行つても中隊に歸つても所謂、要領等といふものは塵程もない、眞面目一點張で精勵して來たのである。

低能に見られる位の彼、然し彼は己といふものを



よく知つてゐる。

俺には能力がない、だから只實行、これだけを決心してゐる。

どんなつまらぬやうなことでも俺の精力のありつたけを出して努力する。俺は何も知らない、然し精心は決して誰にも負けぬ覺悟だ。

口の悪い奴等は俺を稱して馬糞長なんて輕蔑してゐるが俺の役目は馬の手入や馬糞掃除だけぢやないのだ。

彼はかう信じてゐた。

○

珍しくポカ〳〵暖い午後のこと、中隊事務室では崎島の感心な話が持ち上つてゐた。

『曹長殿、古靴下を納めます、十九足ありますが是は洗面場邊りへ捨ててあつたのを、崎島が拾ひ集めて洗濯したものです。まだ結構穿けるのが混つてゐます』

さう言つて一束にした古靴下を曹長に差出したのは崎島の班長茅濃軍曹である。

『おや又か、あいつ此の前も十五六束集めて屆け出たことがあつたが全く感心だ。靴下を粗末にする奴等に少しや崎島の爪の垢でも煎じて飲ましてやらうや』

高本曹長は被服掛だけに崎島の行爲には痛く感心してゐる。

丁度酒保係の澤山軍曹も見えてゐたが

『實際崎島の實踐窮行と來たら感服させられます。私が酒保へ行つた頃は菓子袋の食べ殺や蜜柑の皮等は散らし放題で隨分喧しく注意したものですが、それでも中々改まらないので驅りました。

處が崎島みたいな兵が率先して他人の散らした分なども片附けるものですから、近頃は皆非常に公德心を重んじて閉鎖後の机の上や床等に紙屑一つ殘つて居ない樣になりました』

今度は居合せた荒尾中尉が

『私も一つ彼の善行を紹介しよう。あの面會所傍の便所の手水鑵ナア、あれは水の補充や取換は自然等閑視され易いんぢや、衛兵所からは離れてゐるし、掃除區域の受持は第×中隊ぢやがあれまでは中々氣が附かん。氣が附いても遠くて面倒だからやらんのかも知れんが、私が此の間週番のとき厩の巡察から歸りに彼處で一寸用を足した。處が鑵の栓をひねると入換へたばかりの水が一ぱい入つとる其の周圍も清潔に掃除が出來てる。

かういふ手の屆き難い處を誰がやつたのかと思つて其の後注意してゐると毎日だ。それが矢

張りあの崎島だつた。あの男全く目立たぬ處でよくやつとるよ』

中隊當番の金子一等兵は、崎島の感心な噂話で持ち切つた事務室の隅に小さくなつて、ぢつとこれらの話に耳を傾けてゐた。

彼は崎島が賞められれば賞められるだけ、何か自分が恐ろしい罪でも犯した者のやうに思はれてならなかつた。崎島一等兵に『馬糞長』のニックネームを投げつけたのはどう考へても自分のやうに思はれて後悔された。

そのくせ、彼も上等兵にもなれず未だに中隊當番などをやつてゐるのを考へると、他の者の手前は兎も角、崎島の前に出ると自分の愚かさが身にしみて恥かしくてならなかつた。

その日以來彼は崎島一等兵のことでろくでもない噂をやつてゐる二年兵を見つけると自分を惡口されてゐるやうな氣がして事毎に強く辯解した。

○

長閑な初春が訪れて柳の芽も青くなつて來た。遠山の雪が溶け行くと共に「馬糞長」の噂も消え去つて、誰云ふとなく賞行の人崎島、模範兵崎島として彼は全兵員敬服の的となつた。

洗濯を命ぜられた妻君

『さあ、みんな席へつけ』

佐伯上等兵が班の一同に大聲に云つてゐる。

軍旗祭の御馳走を會食する用意が出來上つてゐるのだ。

『田中と吉原とがゐないがどうしたんだ』

『二人とも撲撃戰に出た前田二年兵殿の軍衣とズボンとを洗濯しに行つてをります』

『さうか今日は雪解けでひどかつたからナ、だが、その前田が居ないぢやないか』

『前田二年兵殿は面會に行つて居られます』

『面會が、妻君だらうナ、ハハハハ、あいつうまくやつてる。

よし、みんな始めよう、折詰の前に坐るんだ、初年兵は始めてだらう、遠慮なく坐れ』

そこへ面會から前田一等兵が歸つて來た。
『吉原と田中は？』
『二年兵殿の洗濯に行つてまだ歸りません』
『そいつは氣ノ毒だ、さうだ、いゝ事がある』
前田は駈け出して行つた。そして餘興を見てゐる妻君を見つけて洗濯場へやつて來た。
『御苦勞々々々、洗濯はいゝから、早く班へ歸つて會食してくれ』
『もうすぐでありますから、やらして貰ひます』
『いかん、いかん、歸つてくれ、オイお前タスキをかけてやれ、今日は軍旗祭だから、叱られはしまい。早くやれ、命令だ。』
『デモあの——盥がないやうで』
『何盥？　ハッハッハ、そんなものはないよ、こゝから水を出してやるんだ、何でもいゝから泥だけでもおとしておけばいゝんだ、たのむぞ、出來たらあそこの干場の針金にかけておけ、さあ、吉原、田中、行かう、今日は軍旗祭だ、元氣でやらう』

無言の慈愛

『隣村でも今晩は特にみんな歸宅を許してあるんだが、お前は歸らないのか』
『はい、自分は歸りたくないのであります』
『さうか、歸りたくないのなら仕方がないが、御兩親に、元氣な顏を見せるのも惡い事ぢやないぞ。いつでも歸りたくなつたら云つて來い』
『班長殿、自分は、自分の村に宿營すると云ふのに、自宅に、歸らないのは、御不審であらうと思ひますが……』
『わけは今聞きたくないが、なるべくなら元氣な顏を見せてあげた方がいゝぞ』
倉橋一等兵は班長當番で、丁度分隊長の班長と一緒に宿營してゐる。
班長は倉橋の出身がこの村である事を知つてゐるので歸つてもいゝと話してゐるのである。

○

それは倉橋の十八の時である。彼は父親と衝突して無分別に家を飛び出して上京、遂に、一かどの不良少年になつて、徴兵檢査の時にはその居所も不明になつて了つたのである。

父親は、何とかして探し出て、子の不名譽を取返さうとあらゆる努力をして檢査の翌年、漸く見つけ出て受檢させた。幸ひに甲種合格になり、お咎もどうやら輕く濟で、今日に及んだ。

入營するときに父親が

『お前はお國の爲めに立派に御奉公を終つて歸るまでは、決して宅の閾を踏む事はならん』と

倉橋に固く申し渡したのであつた。

その晩倉橋からこの樣な事情を聞いた班長は

『お前の心持はよく解る、そして、お前の眞面目な兵營生活は俺からも折を見てお父さんに申し送つてさしあげよう。心配するな』と慰めた。

○

翌朝、出發する部隊を、村はづれまで送つて來た人々の中に交つて、その背後から伸び上る

樣にしてゐる一人の紋付羽織の老人があつた。

倉橋一等兵が、その前を通つたとき、二人の目が、ピタリと見合はされた。

かすかにうなづいた老人の顏に、倉橋一等兵の銃が心持ち動いた。

○

演習終了後歸營した倉橋を待つてゐる一通の手紙は果して彼の父からのものであつた。

『お前の立派な軍服姿を見てわしは總てを宥さねばならなくなつた。この次の休日には是非、お前の元氣な顏を見せて欲しい』と書いてあつた。

神様と股ぼたん

『何をまごついてるんだ、早くしろ』
『ハッ上等兵殿もうすぐであります』
『まだお前はロクに脚絆も巻けないのかあきれた奴だ、それ、もうよその班は整列してるぞ』
急げば急ぐほど、うまく巻けないのだから木山は全くうらめしい氣持で脚絆の紐をしつかり結びつけて、ポンとその上をたゝいた。これで行進中にダラリと解けたら何としよう。
今日こそは大丈夫だぞッ。と、ようような事で巻脚絆をつけた木山二等兵は列中に駆込だ。
赤ばんだ鼻の先に汗の玉がくつついてゐる。
拭ふ間もなく番號がかゝる。一、二、三、……木山は十二と大聲に呼んだ。
『十二番股ボタンかけろ』

『ワッハッハッハ……』
みんなが笑ふ。
ほい、又しくじつたと木山は大急ぎでボタンをかけると
『十二番藥盒の止メ皮かけろ』
又あわてゝ止メ皮をかける。
『十二番銃口蓋はどうした』
おやまだか、木山はポケットを探つたが見當らない。
『忘れて來ましたッ』
『大急ぎで取つて來い』
分隊長も木山の眞面目な顏付を見ては叱る事も出來ないらしい。
いつもかうした鈍重な木山がその日は招魂祭なので町の招魂社へ參拜した。
來合はせてゐた同班の剽輕な古兵が木山を捉へて
『おい木山お前は股ボタンをかけるのを忘れてばかりゐては神様にはなれんぞ』

『ハッ木山は軍裝檢査を受けてから戰死しますから大丈夫であります』

鳩一等兵

鳩ほつほ鳩ほつほ
ほつほほつほと飛んで來い。
子供の時の歌を思ひ出す樣な夕暮であつた。
鳩舍ではグル〳〵〳〵と喉を鳴すもの、隅の方で淋しさうに目を閉じてゐるもの、しきりに嘴で羽根をつくろつてゐるもの、松岡には自分の手飼のこの鳩の一つ一つの氣持がよく解る。
鳩手になつて五箇月、鳩の可愛さやいぢらしさがこの頃は一層感ぜられる。
出した手をついばむのも、何か甘える彼らの心であり、肩に止つて首を傾しけるのも親しみの表情に違ひない。

この可憐な鳩が戰地で、血みどろな働きをして來たのかと思ふとギュッと抱きしめてやりたい程である。
あの隅で目をつぶつてゐる三〇一號は、まだ傷が癒えないのだ。
零下三十度と云ふ寒さの中で二十時間もかゝつて通信をした殊勳者の三〇一號。
途中で羽を射たれて、鳩舍に歸つたときは息も絶え〳〵であつた。
休んでは飛び休んでは飛び、馴れぬ土地の蕭條たる雪の野を使命をつくして歸つて來たのだつた。
もの云はぬ戰士、彼らは何も云はない、默つて自分の仕事をする。
これらの殊勳の鳩に、功章を與へられる事になつたと聞いて松岡はわが事の樣にうれしかつた。
松岡は思つた。
自分は鳩の戰友だ。もの云はぬ彼らにも戰友の情はある。自分の匂を知つてゐるのか足音がすればぢつとあのつぶらな目で自分を見上げる。飛んでゐても手を上げれば手に歸つてくる。

可愛い、この戰友!!
だが松岡はかうも思つた。

自分が鳩手になつてからは誰も自分を松岡と呼んでくれない。
『オイ鳩、オイ鳩』で萬事鳩が呼び名になつてゐる。
『鳩の奴食事もしないで、何してゐるんだ』などと手入が遲れて歸つてくると班ではこんな事を云ふ。
『鳩の奴勤務につかんで、飼育だ何だと云て、サボつてゐやがつて』
などと云ふ聲も聞ぬでもない。
立派な肩章の星二ツ、陸軍歩兵一

等兵松岡扇太郎と云ふレッキとしたつはものだ。
鳩々と二言目には鳩ボッポ扱ひにして……。
松岡は誰もゐない夕暮の鳩舎の前で幾分興奮してゐる自分に氣がついて何だか馬鹿々々しくなつた。
俺もバカだナ、こんなところでひとりグチつて、鳩でいゝぢやないか、實際俺は鳩の戰友なんだから、それがほんとなんだ。
俺が二言目には自分で鳩が鳩がと云ふもんだからさう云はれても仕方がない。ます〳〵俺は鳩になつてこの可愛い戰友と仲よくしてゆかう……。
『松岡二年兵殿班長殿がお呼びであります』
うしろで聲がした。
松岡はハッとした。
(松岡二年兵殿か、俺は鳩とばかり呼ばれてゐるのに松岡二年兵殿、何だか人事の樣に聞えるぞ……)

『ア、すぐ行く、有難う』

初年兵は鳩舎をのぞき込んで云つた。

『二年兵殿、鳩は可愛いですね』

『ウン鳩は可愛いよ』

と答へ乍ら松岡は心の中で、鳩よりも今は自分を松岡二年兵殿と云つてくれる初年兵がもつと可愛い、と思つてゐた。

無形の精勤章

今日は精勤章授與式。

去年の十一月、二年兵が滿期してから今日迄彼等は内務に教練に力一杯働いた。

そして今日は右腕に赤い山形の記章を授與される。

栗原はだがその記章が貰へなかつた。

相憎くと栗原の左右には今迄に精勤章を貰つた者が竝んでゐた。

何だが自分の腕が恥しくて見せられない氣持がし乍らも、腹の中では（何だあいつが貰ふのなら自分も貰へさうなものだが）と穩かでなかつた。

從つてさつきからの中隊長の訓話が、栗原の耳には入らなかつた。

風にふかれて櫻の葉から落ちたのか、栗原の靴の先に毛蟲が一匹のろ〳〵這つて來た。

うつむいたまゝ、靴の先で、その毛蟲をからかつてゐる栗原の擧動が中隊長の目に入らないわけはない。

『誰だ足を動かしてゐるのは、一歩前へ出ろ』

ハッとした栗原はバネじかけの樣に一歩前へ出た。

みんなの視線が栗原に集つてゐる。

『も一歩出ろ』

栗原はそこで不動の姿勢をとつて中隊長の訓話を聞かねばならなかつた。

背中に何かチリ〳〵する視線の矢を感じて、額からは汗が出る。

中隊長はそのまゝ訓話をつゞけたが、栗原にはなほの事何を云はれてゐるのか、たゞもうカッカッと身體中がほてるばかりであつた。

『終りッ』中隊長の訓話は終つた。

『よし栗原、歸れ』

中隊長はものやさしく云つた。栗原は涙ぐんだ目でチット中隊長の目に注目して敬禮した。

『ヨシ〳〵解つた』と中隊長の目が云つてゐる樣に思へた。

小さな石につまづいたりする自分を誰かに見られはしなかつたかと見廻はしながら工務兵であ

ある栗原は工場へ行つて誰もゐない所で暫く腰かけてゐた。

(精勤章が貰へなかつたくらゐでこんなにしよけてはいけない、バカだナ俺はハハハ)

栗原はひとりで笑つた。

(入浴にでも行つて酒保へ行かう)

○

『オイ栗原、貴樣酒をのんでるナ、バカだナ、あれ位の事で何だ』

と一人で酒をのんでゐる栗原の傍へ戰友の中田が來た。

『まあ一杯やれよ、俺だつて酒ぐらゐたまにはやるよ』

『併し貴樣には同情するよ、上等兵候補者になつても上等兵になれないし、精勤章も貰なかつたしナ』

『そんな事云ふナ、俺には解つてゐるんだ。俺の樣な氣の弱いくせにヒガンでゐる者はやつぱりそのネウチがないんだ。

俺はもつと朗かにならねばいけないんだ。

さつき中隊長殿がヨシ歸れと云はれたときに俺はハッとしたんだ。あのときはキット後で叱

られると思つてゐたんだ。
默つて中隊長殿が歸れと云はれたとき俺はシミ〴〵自分の根性が何故かうもひねくれてゐるのかと情けなくなつたんだ。
中隊長殿は俺の腹の中をちやんと知つて、何も云はれなかつたのだ。俺は云はれるよりもよつぽどこたへたんだハハハ』
『それならなぜ酒などをのんでゐんだ、ヤケ酒をやつてるのだと思はれても仕方がないぢやないか』
『さうか、さうだつたナ、いやこれは俺の祝ひ酒だ。
生れ變つた俺のお祝ひだ、さあやつてくれ』
『さうか、うん、無形の精勤章を貰つたわけだナハハハ』
高射砲廠がクッキリと夕闇に浮ぶあたり、海から來る鷗が白い翼をひるがへしてゐる。
『少しそこらを散歩しよう、砲廠の前まで行かう』
歩いてゆく二人の笑ひ聲が尾を曳いて聞えてくる。

内祕の願ひ

空つ風が吹いてゐる。
深呼吸するもの、徒手體操をやつてゐるもの、元氣に充ちた、淸々しい兵營の朝の洗面所風景。
松田初年兵は不格恰な圖體をして、東の方を向いて、今禮拜をしてゐる。
『オイ松田、勿體なささうに、何を拜んでゐるのだ』
戰友の上等兵が、揚子を使ひ乍ら聞いた。
『ハッ内祕であります』
『内祕だ！　何か祕密な願ひがあるのか、かまはん、云つて見ろ』
『ハッ上等兵殿、内祕でありますが、松田は早く戰爭があるといゝと思つて、毎朝願つてをり

ます』

『何、戰爭、どうしてだ』

『上等兵殿、戰爭があると、松田もキツト上等兵になれます。いやなります。

このまゝではとても上等兵になれ相もありません。戰爭に行けば歩調とれなどはそんなにうまくなくてもいゝと思ひます、敬禮だつて敵にはやらなくてもいゝし、突擊なら松田は最も勇敢にやりますから。

上等兵殿、さうなれば松田も上等兵になれる自信があります』

『松田、お前は歩調や敬禮が役立たんと思つとるのか、戰爭に行くには充分それを鍛えてるなくちや、立派な戰爭は出來んぞ、まづそれが第一だ。ウソぢやない、だからお前は歩調をうまくやれる樣に勉强せんといかん』

『やつぱりさうですか、それでは上等兵にはとてもなれさうにもありません』

松田の眞劍な顏を見て上等兵も苦笑するばかりだ。

『だがナ、松田、俺も實は早く戰爭があればいゝと思つとるんだ、内秘だがナこれもハハハ

ハ、俺は金鵄勳章を覗つてるんだ。』

『ではこれから毎朝一緒に拜まうぢやありませんか上等兵殿』

丁度食事ラッパが鳴り出した。

周章てるなッ

『各班、飯上げに行けェ！』

週番上等兵が怒鳴つてゐる。

第四班の中村初年兵は銃の手入れをしてゐたのを、中止して、あわてゝ銃架に懸けた。

そして、營内靴を取り出さうとしたが、そこに自分の營内靴は見當らなかつた。

まゝよ、一寸の間だ、お隣りのをと見たが、相憎くそこにもない、仕方なく一番下の段にある誰かのを持つて下りて、炊事場へ驅けて行つた。

食事が終つてから、さつきの銃の手入のやり直しをやらうとして銃架を見ると、慌にさつき架けておいた筈の銃がない。

おや、架け間違へたのかしらんと一通りズット見て見たが、どこにも見當らない。

當惑した中村は泣き顔になつてそこにゐる連中に

『みんな、俺の銃を知らないか、さつきたしかに、手入れしてかけておいたんだが、だれかが悪戯をしたんぢやないか』

『知らんよ、變だナ、もう一邊探して見ろよ、架け間違つてゐるんだらう、きつと』

『全部、見たんだ、弱つたナ、どうしよう……』

『班長殿に云つて行けよ』

『班長殿に云ふより先に、もう一邊よく探すんだな、俺も見てやらう』

みんなで一通り探して見たが、どうしてもない。

そこへ丁度班長當番の鈴木が、班長の食事を下げて來た。

『おい、中村、班長殿が一寸來いと云つてられたぞ、何だかお前の銃が、あそこにあつた樣だ

ぞ』

『さうか、班長殿が持つて行かれたのか、炊事へ飯上に行つた留守に、それぢや持つて行かれたんだナ、何か叱られるんだ、こりや弱つた』

『とにかく行つて來い、叱られる事なら早く叱られて來い、早い方がいゝぞハハハ……』

中村はおそるおそる班長室のドアをノックした。

『這入れ』

『中村參りました、何か御用でありますか』

『こつちへ來い』

『ハッ』

『この銃はお前の銃だらう』

班長が、傍の銃を中村に突き出した。

受取つて見ると、紛れもない、自分の銃だ。

『ハッ自分の銃であります』

『お前は銃を手入れしたのか』
『ハッ、食事前にやつて居りました。』
『やつて居りましたと云ふわけは？』
『丁度やつてる最中に食事をとりに行つたので途中で止めたのであります』

『手入は途中で止めたが、お前は撃發裝置を點檢したのか』
『……』
『しなかつたらう』
『ハイ』
『お前は銃の生命はどこにあるか知つてゐるのか』
『ハッ撃發裝置であります』
『知つてゐながら何故忘れたのか手入が中途だからと云つて、それをそのまゝにしていゝのか

必ず銃架にかける前には、引金を引ておく事は常に云つてある、これから忘れん樣にしろ』
『ハッ解りました』
『まだある、お前はさつき營内靴は誰のを穿いて行つたか』
『……』
『見てゐると、自分のが見えないので、他の人のを穿いて行つたらしいぞ、さうだらう』
『ハッ惡くありました』
『何故、自分のが見つからなかつたら、軍靴をはいてゆかんか、見えないからと云つて他のをはけば、その人は又他の人のをはいてゆかねばならんぢやないか、いかに周章てたと云つても引金は引かないし他人の營内靴ははいて行く、そんな事でどうするッ。
周章てる時にこそしつかり間違はん樣に氣をつけんでは駄目だ。
今日の新聞を見たか、重大なる時機が來たのだ。と云つてもわれわれは別に興奮する必要は少しもない。金々常日頃の修練をさへ懸命にやればいゝんだ。
細かい内務に氣をつけて周章てる樣な無態な眞似はしない樣にするんだ。

常々の心がけさへ、しつかりしてゐれば、どんな事が起つても周章てるには及ばないんだ、それには内務をみつしりやらんけれやならない』

『解つたか』

『ハッ解りました』

『解つたらヨシ行け』

『銃は持つて行つてよくありますか……』

『ヨシッ、これから忘れるナ』

中村は、銃を持つて、班へ歸つて來た。

行く時のエンマ顔は、歸りのエビス顔だつたので、戰友は意外な顔で、

『おい中村、六神丸を呑まされなかつたのか』

『ハハ、俺なんかには、そんな氣ッケ薬は必要ないんだ』

『それにしてもをかしいナ班長がお前にビンタをくれなかつたのはどうかしてるぞ』

『いや、實は俺も内心ビクビクしてたんだ、これも非常時と云ふおかげだハハハ……』

『非常時がどうしたんだ』

『非常時にはビンタなどは流行らないつて云つたぞ』

『バカ云ふナ、お前なんぞ、非常時だからこそ大いにやられるネウチがあるんだ』

『ところが左にあらずだ、この重大なる時機に際しては、われわれは、内務に演習に決して周章てはならん』

『バカ周章てゝはいかんとは何だしつかりしろ、周章てるな』

『イヤ擊發裝置のまゝで銃を放つておいてはいかん』

『ハハハ、貴樣それで呼ばれたのか、何んだその態は、周章てものはお前一人だ、班長の替りに俺達が六神丸を呑ましてやる、中村、氣をつけェ！』

『降參、降參、これから氣をつけるであります』

『ヨシ、行け、ハハハ』

初年兵同志は朗らかに笑ひ合つた。

街では何か號外らしい鈴が走つてゐる。

溢れる元氣

薄明がほの白く班内へさしこんでゐる、まだ明けやらぬ夏の夜。

長い野營から歸つてくる中隊のラッパが遠く近く風に乘つて聞えて來る。

殘留兵は舍前に整列してそれを待つてゐる。手に手に糧袴衣袴を持つて。

元氣さうな戰友が眞黑になつて歸つて來た。

『御苦勞解散』中隊長の聲に一同待ちかねて脚絆をときにかかると

『待て、軍裝は舍後で解け、それから戰友の渡す被服を持つて直ちに入浴に行け舍内にはそれまで入つちやいかん、殘留兵は兵器だけを班内に入れッあとは胸壔に置いて乾燥』

週番下士が大聲で命じた。

『山本古兵殿』

『植木古兵殿』

『オーイ俺は此處だ、服を持つて來い』

『井上古兵殿持つて來ました。やられましたか』

『喰はれたよ、ホレこんなに』

『痛くありませんか』

『ナーニ大丈夫だ南京蟲の奴め大分絶食してたと見えてヒヨロヒヨロしてたから俺達輸血してやつたんだ、ナアおいみんな』

『さうだ今頃は元氣恢復してゐるだらう、だが今度お前達が行く迄には衰弱してゐるから輸血して來てやれハハハハ』